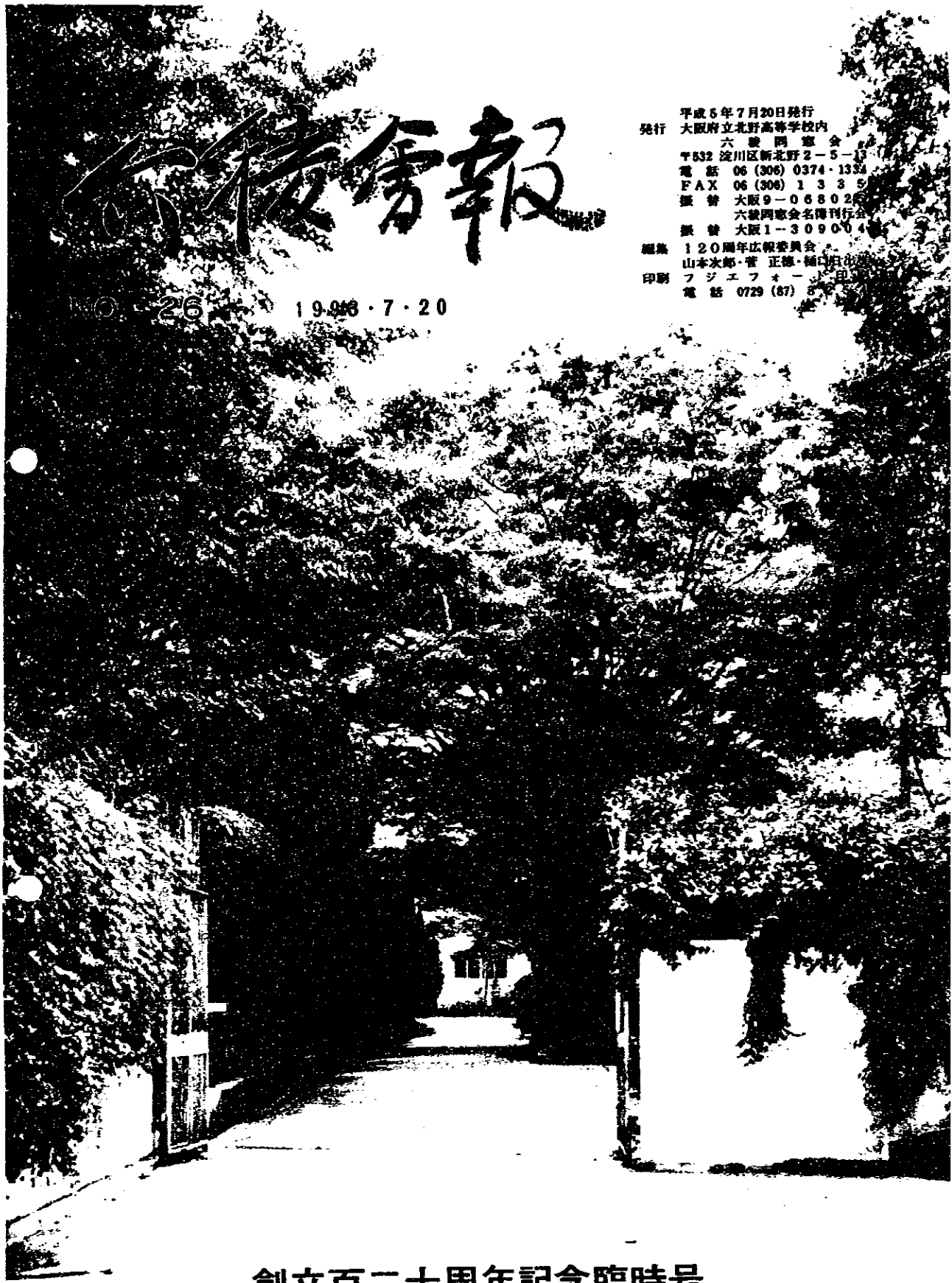
六稜同窓報

NO. 26　1996・7・20

平成５年７月20日発行
発行　大阪府立北野高等学校内
六稜同窓会
〒532 淀川区新北野２－５－13
電話　06（306）0374・1334
ＦＡＸ　06（306）１３３５
振替　大阪９－０６８０２６
六稜同窓会名簿刊行会
振替　大阪１－３０９００４
編集　１２０周年広報委員会
山本次郎・菅　正雄・樋口日出雄
印刷　フジエフォー　印刷
電話　0729（87）



創立百二十周年記念臨時号

創立百二十周年 記念式典 と 記念行事 の ご案内 !!

ＯＢと現役らで『第九』を全楽章演奏

１０月３０日に記念式典

講演は 森毅京大名誉教授

大阪でもっとも早く開校、創立百二十周年を迎える母校は、関係者らによって記念式典などの行事の準備に追われている。

記念式典などのメインの行事は10月30日にフェスティバルホールなどを会場に３部構成で行われる。**第１部の記念音楽会**は卒業生、在校生ら北野関係者だけのオーケストラと合唱団による画期的なベートーベン**『第九』の全楽章演奏**であり、早くも各方面から注目されている。

記念の行事は30日の土曜日、大阪市北区のフェスティバルホールで正午に開幕。第1部『第九』の演奏には、卒業生、現役、旧職員、ＰＴＡなど北野関係者約300人が出演。

昨年春、音楽科の佐々木先生を委員長とする実行委員会が結成され、オーケストラ部とコーラス部のＯＢ会の『楽友会』と『棱声会』が中心となって、今年１月から練習をつんできた。５月にはオーケストラとの合同練習も始めている。ソリストには旧職員の木川田誠氏をはじめ、小林正夫、竹本節子、田中千恵子の３氏が決定している。

田中千恵子(ソプラノ)

竹本節子(アルト)

小林正夫(テノール)

木川田 誠(バリトン)

第２部の記念式典では、百二十年を記念して製作された**『映像でつづる北野百二十年の風景』**が上映される。北野の歴史をビデオとスライドを組み合わせ、斬新な映像で描く。この作品は98期の谷卓司氏が、会報の募集した『記念事業アイデア』に応募、採択されたもので、谷氏は意欲的に取り組んでいる。なお、当日上映分は１巻ものビデオとして保管される予定だ。

第３部は記念講演で、最近、著書やテレビでも活躍されている京都大学名誉教授の森毅氏(58期)が講師。森先生の母校での講義が楽しみだという声が寄せられている。

森　毅（もり・つよし）

関数空間の解析の位相的研究、数学教育カリキュラム、数学の文化史的研究。三高在学中より歌舞伎、三味線にこり、東大時代に早くも評論家として各誌に執筆。昭和26年に北大助手となる。32年京大助教授になり、数学教育協議会副委員長として活躍する。主著に「現代の古典解析」「位相のこころ」「数学の歴史」「異説数学者列伝」「数学と文化」「学校ファシズムを蹴っとばせ」のほか、編著に「キノコの不思議」など。

午後６時からは会場をロイヤルホテルに移して祝賀会。演出は昼の行事と同じ西村一男氏(60期、朝日放送)が担当する。準備委員会では、例年の総会にくらべて数倍の出席者を見込んでおり、同期ごとの歓談ばかりではなく、運動各部の先輩、後輩間の世代を超えた交歓の輪が広がるものと期待している。

こうした祝賀行事とは別に、注目されるのは**９月30日(木)から10月４日(月)まで開かれる『六稜会展』**だろう。**会場は大阪・梅田のナビオ美術館(ナビオ阪急３階)**で、卒業生と旧職員による展覧会で、絵画、彫刻、陶芸、木工、デザイン、建築、書、漫画、写真など多岐にわたり、約80点の作品が展示される。

また、ふだんは校長室の金庫に眠っている佐伯祐三氏(30期)の『ノートルダム』や、手塚治虫氏(59期)の漫画原稿と在学中の写生画なども出品される予定で、観賞者には貴重な機会になりそうだ。

なお、**入場は無料**で、だれでも鑑賞できる。

一番早くから準備しているのは**記念ＣＤの制作**である。既にマザーテープは完成し、間もなくジャケットも出来上がる見込みだ。校歌、応援歌のほか、森繁久弥氏(45期)の歌とメッセージで構成されている。

このほかに、記念品として**『百二十周年記念誌』**が執筆、編集中だ。北野の歩みを写真をふんだんに使って構成。母校の小出猛先生(66期)を中心とする先生らが奮闘中だ。

この２点の記念品は、**募金２口以上の会員に送付**される。また、**希望者には実費で販売**される。

あゝ 感動の一瞬!!

“平成五年三月二十一日 午後四時三十分”　　53期　野口藤三郎

平成５年３月21日午後４時30分。それは、私の生涯忘れ得ぬ一瞬となった。

本年10月、北野創立・百二十周年記念祭に『フェスティバルホール』で『六稜交響楽団・六稜混声合唱団』が、演奏する、ベェトォベンの『第九交響曲』の最初の合奏練習の日だった。

正午すぎ、私は、阪急電車・十三駅の改札口を出て、母校に向った。人品卑しくない老若男女が、みな同じ方向へ向って歩いて行く。この方々は、皆、『第九交響曲』の練習にかけつけて戴いたオーケストラとコーラスの人たちだった。

遠くは埼玉・東京・名古屋から、旅費自弁で、年齢も大正15年卒業の先輩から、平成５年の卒業生まで、管弦楽団70・合唱団180。総計250余名！

練習は、第一楽章から始まって、第四楽章を午後４時30分に終った。凄い迫力だ。

北野創立以来、母校の歴史で初めて本格的なベェトォベンの『第九交響曲』が講堂に響きわたった。しかも我々卒業生の手によって…。

言い知れぬ感動に胸を掩われ、私は不覚にも、泪を押えることが出来なかった。

世に稀なものがそこにあった。現時、華麗な演奏は数多い。だが、溢れる感動を受ける演奏は実に稀である。それが、ここにあった。この感動の一瞬を、私は生涯忘れ得ない。

百二十周年記念事業募金のお願い

ようやく　六千万円突破！（目標一億円）
再々度、そして最後のお願いでーす !!

昨年の７月、第１回の百二十周年記念事業のご通知とともに、基金のご協力をお願い申し上げましたが、年を越えても３千万円がやっとという事態に、実行委員会でも本年３月、再度のお願いをせざるを得ないとの結論に達し、総会等の出欠確認とともに、振込用紙同封の上、皆様に再びお願い申し上げました。一部にはすでに送金済みにもかかわらず、この様な依頼は失礼だというお叱りも受けましたが、新たなお振り込みも多数いただき、また、追加してお送り下さる方も随分多く、委員会としましては心から厚く御礼申し上げます。別表の期別の募金と、名簿広告申込人数、金額（６月30日現在）をどうかご一覧下さい。

募金応募者は4897名となっております。現在、同窓会在籍数は22,714名（物故・不明・海外除く）のうち、残念乍らいまだ22%にしかすぎません。百二十周年の記念事業は、10月30日の総会を中心とした行事の他に、**『六稜史料館を併設した六稜会館の建設』**を大きな目標にいたしております。また、近年とみに注目されております**高校間の国際交流に資するための基金**もこれを機会に設けたいと考えております。今回の皆様のご芳志をもとにして、六稜同窓会会員、北野高校の後輩諸君とともに、**21世紀に向けての新たな構想を実現**して参りたいと考えております。

今回の六稜会報臨時号発刊を機に、今一度、皆様の温かいご理解を賜わりますよう、伏してお願い申し上げます。

今回はすでにお振込の会員の皆様には、お振込み済の印を入れさせていただいています。もし手違いがございましたら、何卒、事務局までご一報下さいますよう、お願い申し上げます。

六稜同窓会会長
百二十周年記念事業委員長　　鴻池　藤一
同　　募金委員長　　稲畑　勝雄
同　　募金委員（各期理事）一同

120周年記念募金(中間)・記念名簿広告協賛金の状況（期別）（1993．6．30 現在）

期	記念募金		記念名簿広告		合計金額	期	記念募金		記念名簿広告		合計金額
	人数	金額(千円)	件数	金額(千円)	千円		人数	金額(千円)	件数	金額(千円)	千円
旧職員	72	1,140			1,140	67	155	1,835	8	635	2,470
28期	1	5			5	68	163	2,132	10	555	2,687
29	1	10			10	69	158	2,099	13	526	2,624
30	2	25			25	70	122	1,442	2	70	1,512
31	3	35	1	35	70	71	119	1,342	2	100	1,442
32	2	15			15	72	136	1,890	1	35	1,925
33	6	105			105	73	114	1,312			1,312
34	1	10			10	74	99	1,010	3	275	1,345
35	4	60			60	75	95	1,130	3	190	1,320
36	6	87			87	76	77	858	1	35	893
37	12	130			130	77	61	695	1	35	730
38	8	90			90	78	81	857	3	290	1,147
39	18	284			284	79	59	630			630
40	24	260	1	120	380	80	68	651	2	105	756
41	23	330			330	81	62	605	1	50	655
42	32	438	1	36	473	82	84	940	5	260	1,200
43	35	1,750	2	470	2,220	83	39	372			372
44	28	355			355	84	81	823			823
45	40	478			478	85	52	573	1	50	623
46	39	615			615	86	51	485	3	140	625
47	49	740	2	85	825	87	55	612			612
48	47	840	2	85	925	88	54	649	1	35	684
49	67	875			875	89	43	395			395
50	53	750	1	50	800	90	35	310	1	50	360
51	71	905	1	35	940	91	34	323			323
52	82	1,093			1,093	92	54	526			525
53	83	1,281	3	105	1,386	93	43	386			386
54	73	925			925	94	34	330			333
55	74	965			965	95	47	401			401
56	91	1,772	1	70	1,842	96	47	533			533
57	93	1,390	9	520	1,910	97	51	457			457
58	90	1,060	3	155	1,215	98	40	343			343
59	67	855	2	120	975	99	38	344			344
60	74	990	8	570	1,560	100	43	371			371
61	97	1,330	9	1,360	2,690	101	34	315			315
62	118	2,270	29	1,695	3,965	102	46	366			366
63	130	1,588	9	430	2,018	103	59	492			492
64	127	1,454	1	60	1,504	104	94	802			802
65	132	1,579	8	700	2,279	105	51	450			450
66	150	1,850	2	105	1,955	合計	4,897	60,879	156	10,230	71,109

“特集”六稜クラブ活動小史

明治６年(1872年)４月23日、創設開業の期とす（学校日誌による)。

大阪府令第153号により欧学校（同年５月２日には府令164号により集成学校に変更）が、東区南久太郎町５丁目難波御堂内に設立された。その後、校名は変遷するが、学制にもとづく学校としては本邦でもっとも古い歴史を誇る北野の誕生である。母校の歴史については、今秋発刊の北野120年史に詳しいので、ここでは、クラブ(部)活動、あるいは生徒の余暇活動に限って、振り返ることとしたい。

六稜クラブ活動をたどるとき、明治25年(1892年)の校友会創設がその原点となる。校友会を文芸・武道・運動の３部に分け、生徒はいずれかに属するものとした。運動部は陸上と水上に分かれ、水上には漕艇と水泳、陸上にはテニス、ベースボール団などがあった。

この校友会組織は改正を経ながらも、昭和16年、報国団に改組されるまで続き、六稜クラブ活動の発展に寄与する。

明治29年に発刊された校友会誌『六稜』は昭和16年の91号をもって廃刊になるが、実に35年の間、校内の情報誌として、創作・研究の発表の場としてはたした役割は大きい。

第二次大戦後の昭和20年９月、報国団は解散、校友会が一時的に復活し、運動各クラブの他に、地歴、物象、生物などの班が新たに或いはもう一度生れるが、昭和23年６月、校友会は正式に解散、これにかわって北野高校自治会が発足。その傘下に運動、文化の各クラブが生まれ、百花撩乱の時代を迎えて今日にいたるのである。

この特集では、運動関係20、文化関係20の合計40団体をとり上げた。時間の制約もあって不備な点も多いが、120周年を機に、ＯＢ各位が今一度、それぞれのクラブ活動を振り返るよすがになり、各クラブの今後の発展にいくばくかでも役に立てば、と思う。

【自治会の歴史】
北野を揺るがした勤評闘争
運動部室の電灯設置要求も

▽ 校長排斥運動

北野高校自治会は昭和23年５月24日、発足する。戦前の校友会が、戦時中には報国団に改組され、敗戦後に、また、校友会が復活した。昭和20年９月１日、授業は再開されたが、戦争の後遺症は生徒の心の中に深い傷痕として残り、田村校長排斥運動がおこった。この間の事情については、六稜会報No.19座談会「北野の教育」(戦中戦後編）に詳しく紹介されているので、これを参照して頂きたい。

▽ 自治会の誕生

昭和23年４月、大手前高女と北野中学の間で、生徒と教員の交換が行われた。同年５月24日、校友会は廃され、学校自治会が発足。全生徒の投票により初代会長は内藤寿一氏(61期)が選出された。任期は一学期。投票方式は、２名連記とし、全立候補者のうち得票数１位が会長に、以下副会長、書記２名、会計、と計５人が選出された。テーマは男女共学のメリットをどう生かすか、生徒の意見をどう汲み上げるか、自治会費の分配、会則の審議と、創設期特有の性格であった。会則の審議は３学期（会長徳永行平氏(63期)になっても続けられた。焦点は、名称を「学校自治会」とするか「生徒自治会」とするか、最終決定権は校長にあるのかどうか、という点にあった。自治会役員を始めとし、生徒間での議論はいつまでも続き、結局は「学校自治会」として発足し、「校長は決定権を留保する」というところで決着した。会員は生徒を正会員とし、教職員を特別会員とする意味でも学校自治会であった。

昭和24年度より執行部５名連名の立候補となった。まとまりのなかった執行部を是正するためであった。

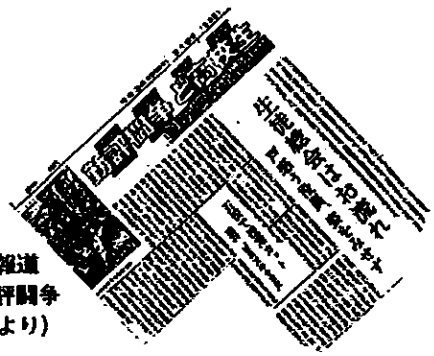
昭和25年になり、教育界はマッカーサーの勧告によるレッドパージの嵐に見舞われた。その後、昭和27年４月には破防法反対ゼネスト、５月１日には血のメーデー事件が頻発、６月には北野生徒名が逮捕された吹田操車場事件がおきた。自治会と直接関係がなかったとはいえ、以後、自治会活動は低迷する。一方、社研をはじめ、民主々義、社会主義の名を冠した研究会が誕生し、議論は盛んであった。

▽ 修学旅行男子参加要求

昭和30年頃の自治会は、生徒の声を反映する中で、もっぱら男子生徒の修学旅行参加に向けられた。自治会にとって長い間の懸案事項であったが昭和42年３月、初参加が叶った。500名中476名が参加した事実も、いかに生徒達が永年待ち望んでいた事かがわかる。現在も実施されている。

▽ 勤評闘争

昭和32年12月日教組は勤務評定に対する危機感を強め全国の教員組合に向けて緊急事態を発表した。教員の昇給をストップする初期の目的から、教員の組合からの離脱を促し、平和、民主教育への圧力へと拡大していった勤務評定に対する闘争宣言であった。昭和33年に入って高知県では生徒を巻き込んだ勤評反対闘争が展開され、次いで大阪にも飛び火した。昭和33年一学期、高教組北野分会は勤評反対のハンガーストライキを決定した。しかしそれは授業を犠牲にはせず、ドクターストップが入るまで続けられた。組合は、生徒へ、ハンガーストライキ決行中の知らせはしたもの、、勤評に関するアピールは何等なされなかった。しかし１週間から10日程も続く、異様な授業風景は生徒を動揺させていた。２学期に入り、後期自治会(会長丸山公為氏72期在学中病死)は、勤務評



新聞に報道
された勤評闘争
(毎日新聞より)

定を意識しながら活動し始めた。10月黒田了一教授（市大法学部長後府知事41期）を招き、勤評についての講演会を開き、11月には弁論部と共催の第１回優勝弁論大会を開催10人の弁士中、社研部長は勤評反対の論陣を張った。又、12月には久しく絶えていた自治会機関紙を発行、紙上、勤評は生徒の利害と無関係ではないと主張した。この頃、持病の腎臓病が悪化した丸山は入院し、二度と登校しない。

昭和34年２月２日(月)北野教組（田上委員長）は、林校長、藤井教頭不信任決議声明文を、大書して校門に張り出した。その後一週間、自治会と生徒全員を巻き込んだ騒動に発展する。

翌３日早朝より臨時生徒総会を告げるビラを配布した後、午後12時半より総会を講堂で開く。左右激烈な議論の中、１時には閉会、翌４日に持ち越す。４日の総会はテレビカメラが入り、新聞記者の取材活動が行われている中、結論の出ないまゝ推移、３日目に持ち越される。

２日目のマスコミの取材攻勢に遭って、総会を正常な議論の場にしていく自信がなかったからであった。第二回総会は、強引なテレビカメラに対して場内は騒然としていた。また、３日午後の自治会室には来訪者が多かった。指導部の井内先生を始め、就職間近の３年生女子、大学生のオルグ、新聞記者達であった。唯一、組合からの接触がない事が当時の執行部としては解せないところであった。組合は、少なくとも生徒を煽動したという誇りだけは受けたくなかったのであろうか。第３回生徒臨時総会は、６日に開かれた。マスコミは新聞記者だけで、カメラは一切会場には入らないという約束が出来た上での、昼休み中30分間の総会であった。最後に執行部より、修正を重ねた決議文が提案され、続く５時限目のホームルームでの討論、採決を期して解散した。

提案された決議文は概ね以下の内容であった。「先生方の勤評反対闘争はやむを得ないものと思う。校内の秩序を回復し私たちが勉学に専念できる環境を作るためにも、林校長には勤務評定書を提出しないよう要望する」。３年生の一部クラスで採決が取れなかったが執行部決議案に対して、賛成795、反対190の結果を得た。全校生1360名のうち６割、意思表示をしたうちの８割が執行部案を支持した。翌８日(土)決議文は校内に張り出され、執行部３名が校長官舎に赴き、玄関の間に応接に出られた林校長に、決議文を読み上げた上、手交した。それは厳粛な儀式を行うような雰囲気であったと、当時の生徒は証言している。騒動は一週間で完結し、その後自治会の動き、生徒の動きは一切なかった。

▽ 勤評闘争の後始末

用心深く立回った執行部とはいえ、当初から予告恐迫されていた処分は、無届、無許可集会を強行したという点で断固行うべしという学校側の方針であった。昭和34年度前期執行部（宮武和義会長72期）は、処分反対の運動に終始した。ＰＴＡも処分反対にまわった。処分は撤回された。しかし、組合の一部の教師が生徒を煽動した結果であり、全ての責任はその教師にあるとする組合と学校側の妥協により、生徒に対する処分は行われなかった。大阪の教育を変えるときは北野から始められる。軍国主義化の田村校長もしかり。勤評闘争も高教組の重要拠点は北野であり、府教委の守るべき拠点も北野である。校長も教職員も生徒も不運であった。

▽ 大学学園紛争の影響の中で

昭和43年度より48年度までは自治会執行部は成立していない。43年日大全共闘、44年東大紛争と一連の学園民主化闘争のあおりを受けて一部生徒の動きが44年文化祭時におきた。

この年の文化祭の講演をめぐって学校側と対立した一部生徒は、井上清京大教授を呼び、講演させる様要求、３名が廊下でハンストに入った。ハンストは間もなく鎮静した。浦野博夫校長は直接井上教授に会い、文化祭には行かない旨の返事をとり、後日改めて生徒諸君の要望もあるので、正式に学校より講演依頼をした。講演は質疑応答の時間を用意して行われた。教授の講演は「私はアジテーターではありません」との第一声から、日大闘争、東大闘争の経過を述べられた様だが、質疑応答に見られたように、北野生の反応は冷静で、冷めたものであった。

自治会執行部の成立していない中での事件であり、以後、政治色を嫌ってか、執行部の候補があっても不信任され、45年以後は候補も出なかった。

▽ 自治会の現状

昭和53年度、54年度は、執行部は成立せず、またもや空白期間となった。議会の委員による北野年誌は、自治会の危機を嘆え、生徒の関心を求め続けている。

昭和54年度後期より執行部は復活するが、64年度までは前後期同じ執行部によって支えられている。64年度は木村敏子会長（103期）と、始めて女性会長が誕生した。

昭和65年以後は現在に至るまで前期執行部は不成立、後期のみ成立している。この間、生徒の要求を汲み上げるべく、アンケートや投書箱の設置を試みるが、生徒の反応は薄い。

運動部室の電灯設置の要求は10年以上続けられているが、火災予防の観点から実現されておらず、自治会も諦めているようである。女性からの要求である吊りバンドの使用をとり上げた執行部もあったが、許可されていない。服装についても30年代に比べてかえって厳しそうである。

以上、北野自治会の歴史の一部を記したが、誤解、誤認の点はお許し頂きたい。

【野球部】

明治26年(1893年)４月３日、本校最初の対外野球試合で同志社に敗北（創立110年史）。

ちょうど100年前のことであり、当時は大阪尋常中学校の時代、校史史料、学校日誌によれば、卒業生24名の年というからおどろきである。

明治31年(1898年)には「奈良県中学校の野球競技会に校長以下選手10名を引率して出張」とか、同年９月「城内練兵場にて第五中学（後の天王寺）生徒と野球競技あり。本校破る」等の記録あり。その後、天王寺・市岡との試合が毎年続く。

特に市岡との毎年の定期戦は、当時の一高・三高戦にも比すべき源平の紅白旗（北野は白）を打ち振り大阪名物となった。しかし、大正11年、両校応援団の乱闘騒ぎから中止となった。

なお、記録によれば、瀧川事件の瀧川幸辰京大総長、佐伯祐三画伯も野球部の先輩である。

▽ 甲子園への初出場

昭和２年(1927年)、第13回全国中等学校野球大会の大阪予選を勝ち抜き、大阪代表として甲子園に初出場。

一回戦で強豪大連商業を４－３で破り、二回戦で水原茂の高松商業に１－８で敗退したが、同商業はこの年優勝している。その直後の中部日本選抜野球大会（金沢）では見事優勝をはたしている。

▽ 戦後の黄金時代

第二次大戦が終りをつげると、白球に餓えていた六稜健兒は直ちに野球部を再建。昭和23年(1948年)の選抜に大阪代表としての初出場に引き続き、３年連続の出場。まさに甲子園原頭に北野の名をほしいまゝにした。なかでも昭和24年(1949年)には戦前の予想をくつがえし、中西太の高松一高、福島一雄の小倉高、西村修の桐蔭等、超高校級が輩出したこの大会で、清水治一監督(57期)ひきいる北野は無欲の快進撃を続け、日川、桐蔭、岐阜商を連破、遂に優勝戦で芦屋高校に延長12回の熱闘の末、快勝。六稜の歴史に残る大きな一ページを飾った。

北野高優勝ナイン

6	市村　博
2	広瀬繁雄
8787	長谷川圭市
1818	山本次郎
7171	多湖隆司
3	梅田　明
9	慶留間一
4	市石　巌
5	品川　潔

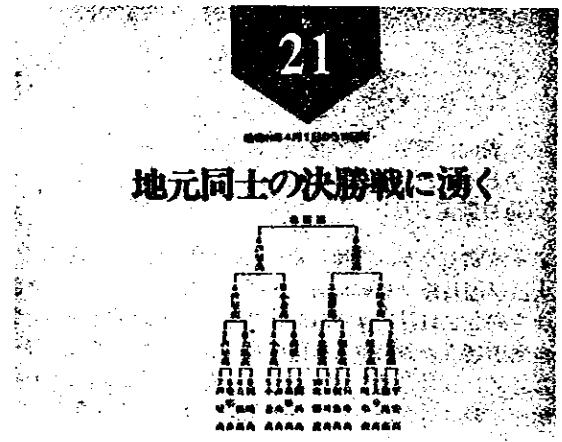
その後、昭和27年(1952年)にも選抜出場をはたしたが、初戦で敗退。

しかし、大阪に北野ありの名声はこの４回の出場で全国に知れわたり、強い野球部への入部を目指し北野進学を希望する中学生が増加した。

昭和30年から３年間も好投手丹羽弘氏(70期)を擁して予選で今一歩のところまで行ったもの・涙をのみ、その後はめぼしい成績はない。

しかし、部員数は現在69名、母校体育科教諭でもある篠崎友宏氏(92期)が夢よもう一度と厳しい指導を続けており、ＯＢ会も多湖隆司会長(63期)、磯村昭夫事務局長(72期)のコンビを中心に後輩たちへの物心両面の援助を続けている。

甲子園全国制覇!!
創部１００年の六稜野球部



【ソフトボール部】

昭和24年の創部。北野100年史によると、男女併設の部で、稲葉憲一郎先生(旧姓田中、昭和58年退職)が顧問。先生と男子主将が指導していた、とある。女子部だけになった時期が明確でない。30年春には48校が参加した中で、中央大会に進出、ベスト８に名を連ねている。

その後、低迷を続けていたものの50年に入ると、一学年に10人前後の部員にも恵まれ、53年には参加87校、中身の濃いベスト16になった。というのも準々決勝で敗れた相手が優勝した泉州学園高校で、対北野戦をのぞいて決勝戦までコールド勝ちしていたからだ。加えて同校の監督は『唯一の苦戦』と評価したほどだった。

平成４年には大阪総合体育大会でベスト16に、秋の部別大会では念願の１部（参加130チーム中、春夏の成績上位24チームで構成）に進出した。この年には２年にスタートした第１学区公立大会に優勝している。

『ＯＧ総会』は毎年開催、現役との交流試合のあと、懇親会となるが、昔話はきまって旧の図書館で泊まり込んだ合宿のことだそうだ。98期の三砂多津子さんは『自宅から扇風機やかとり線香を持ち寄っての寝起きは、恐怖でもあったが楽しみだった。食堂の合宿食は夏バテと疲労で半ば拷問でした』と振り返っている。

【剣道部】

ベテラン剣士も北野道場
剣道ＯＢ会の発足へ

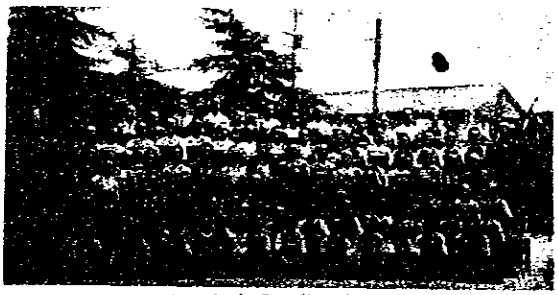
殖産興業、富国強兵が国是だった時代を映し、柔剣術などは建学以来、盛んだった。

北野80年史では、明治27年４月、柔術、剣術が正科に採用されている。部活動というより、正規の授業で剣術すなわち剣道が教えられていたのだ。

明治25年に発足した校友会の会則をみると、部は文芸、武術、運動の３部なり、とあり、単独の部としては存在しなかったようだ。さらに、大正15年に改正された校友会則には野球部などと並んで『武道部（剣道、柔道）』と記されており、柔道部とともに、このころぐらいが創設の時期と考えてよさそうだ。

▽ 恩師井上先生の指導で開花

しかし、校史などに初めて登場する『剣道部』は、昭和15年５月19日である。『剣道部、全関西大会で優勝』（北野110年史）。



昭和15年全盛時代の剣道部員

56期の青木博氏によると、13年に剣道の先生として北野に着任された井上正孝先生の指導が、剣道部を大きく発展、変質させた、という。先生の教えは勝ち負けばかりにこだらず、気位と気概を持つことが中心だった、が、わずか４年の在籍だったが、その教えが花開き、先述の関西大会の優勝をはじめ、16、17年の近畿大会優勝や18年の大阪府中学大会での青木氏の個人優勝へと続く。

が、戦争の影響が色濃くなり、校友会も報国団へ改組、剣道班として縮少され、休部へと追い込まれてゆく。

しかし、井上先生の教え子である中尾益朗氏(54期)らは『井上正孝先生を囲む会』を結成、86歳の現在も玉川大学の師範を務める先生を招き、毎年“ＯＢ”会を開いている。

▽ 高まるＯＢとの交流

復活が一番遅れた剣道部も、30年に、当時２年だった長東達也氏(69期)が、奔走、再建にこぎつけた。３年後には、大阪大会で準々決勝に進出する“剣豪”も誕生するなど成績も徐々ではあるが上がっている。なによりもこの男集団にとっての喜びは、女流剣士の誕生だろう。

第１号が西井かつ子さん(78期、現橋本)だ。入部当時、たった１人の部員とあって、いろいろの大会などには出場もままならず、女子高校のなぎなた部などとの練習試合が主だった、という苦労話が、やっと今ごろになって伝ってくる。その女子部も60年には、インターハイの大阪府予選で団体７位となり、近畿大会へこまを進めている。

『井上正孝先生を囲む会』のベテラン剣士東新氏(54期)も、このところ、週１回北野道場へ通い、後輩との練習や指導の機会も増えている。『六稜剣道部ＯＢ会』発足の気運が一気に高まっている。

【バレーボール部】

創部の年に府準優勝
仲良い男女のバレー部

部創設の年に早くも府下大会で準優勝する。という他部に例のない、順調なスタートだった。その男子部が昭和12年４月、23年４月には女子部が発足した。

同年国体西日本予選に出場、11月には京都で開かれた第１回の近畿大会にも駒を進めた。その後の活動も順調で、30年11月、48年５月に１部優勝を飾り、49年の春の高校バレー大阪府予選で準優勝。この年から３年連続で近畿大会に出場の好成績を残した。

一方、女子部の成績も目を見張るものがある。28年４月の府民大会で、四天王寺高校を破り優勝、６月には大阪府準優勝、９月には近畿大会に優勝した。第８回国体に大阪代表として出場した。この年と翌年の29年は１部リーグで優勝している。

▽ 誇りだった木本氏の活躍

現役の活躍もさることながら、ＯＢの活躍も特筆に値するものだ。創部の翌年の22年11月に結成された『六稜クラブ』はクラブ大会に度々出場、50年のクラブカップでは、全国大会に出場している。特に初代のキャップテン木本恒雄氏(60期)は、27年から３年連続、東西対抗で西軍のメンバーに選抜されたほか、黄金時代の東レ九膝会の名バックで、その活躍に刺激された後輩も多く、北野バレーの誇りだった。29年には全日本の代表として海外遠征に参加した。その後、東レ女子の監督に就任した。

初代ＯＢ会の会長も務めたが、今年５月に他界、会員の無念さは想像に余りある。

▽ 女子が18年ぶりに１部昇格

また、このクラブの特徴を挙げれば、男女部員間の仲の良さもその一つだろう。44年には部員同士のカップル第１号が生まれ、60年には６組目の結婚となっている。

仲良く低迷を続けていたバレー部も、女子が57年に近畿大会に出場、７月には18年ぶりに１部に昇格した。

【陸上競技部】

戦後も400リレーで全国制覇

第１回全国大会400リレーに優勝（昭和23年）

極東選手権に本校生が代表

陸上競技だけではないが、新聞などのスポーツ記録で『北野』の名を見付けたときの喜びは格別である。大学入試が難しくなったことや学校が増えたことなどもあって母校の不振が続き、その名を紙上で発見できぬのはＯＢにとって淋しいものだ。

とりわけ、戦前は全日本の代表にもなった幾多の名選手を輩出し、戦後も全国大会で400メートルリレーで優勝するなど輝かしい歴史を持つ陸上部関係者の思いは、ひとしおだ。それだけに後援会の結束も固く、活動も活発だ。その証しとも言うべきものが昭和49年に、発刊した『北野陸上競技部史』であろう。

▽ 明治の時代に早くも活躍

こんな伝統を誇る部であるが、部創設の年代が定かではない。明治32年７月発行の『六稜』第13号によると、同年４月11日、堺の第２中学で開かれた大運動会で３選手が出場、１位になった、との記述の後『わが陸上運動部未だ衰えたりとすべからざるか』とある。さらに同33年５月の第16号は『２月に開かれた府下６中学連合運動会に、選手11名が出場』と記されているが『部』として存在していたかどうかは不明である。というのも、当時の選手の多くは、野球部の選手で、陸上はその才能を生かした余技だったようだ。

後年、極東選手権などで活躍した25期の北村（旧姓岡本）栄二郎氏も野球部の選手だった。明治40年10月17日に大阪府10中学連合運動会の600競走で優勝するが、当時の新聞は『北中岡本君は、２位の天中岡田源次郎君に２間、３位の市岡中佐伯達夫君に６間の差で勝つ』とあり、その実力は相当なものだった。ちなみに３位の佐伯氏は野球部の選手で、存命中、高野連会長として活躍されたのは周知の通りである。

北村氏は、神戸高商の陸上競技部を創設され、大正４、６年の極東選手権に日本代表として出場、６年では走り幅跳びで２位の好成績を収めた。

▽ 超中学級鴻沢氏の活躍

大正４年７月の『六稜』に『本年度より徒歩部を新設する』との記述があり、この年が陸上競技部の正式なスタートであろう。第１号のヒーローで、部史上最高の主役は鴻沢吾老氏だ。部史も『本校の歴史の中で、すべての運動部を通じ、在学生として空前絶後の巨大な足跡を残された超々中学級のアスリートであった』と、鴻沢氏に最大級の賛辞を送っている。

部史から、鴻沢氏の活躍を拾ってみると、大正６年４月の第２回東西対抗陸上競技では、円盤投げ１位、走り高跳び２位、五種競技３位の大活躍。朝日新聞は円盤を手にした写真をトップに、見出しは『西軍の麒麟児 北中生鴻沢君』だった。５年生の大正８年、第２回中学選抜選手陸上大会では走り幅跳びなど５種目に出場、全種目を制覇した。５月のマニラでの極東選手権大会には12人の陸上代表選手の一人として出場、唯一の中学生代表だった。

大正14年に徒歩部から競技部に改称。昭和13年の府下中学校連合陸上大会では１年から５年まで学年別で各学年が優勝の快挙をなしとげた。

▽ 400リレーで全国制覇

学制改革で新制高校となった昭和23年には女子部も発足したが、特筆すべきはこの年、第１回全国高校大会の400メートルリレーで優勝したことだ。メンバーは竹井一郎、鶴田康、安田哲也、岩田準一の４氏。岩田氏は100でも２位となり、学校対抗も全国６位だった。この大会は７月23～25日、名古屋・瑞穂競技場で行われた。インターハイだ。３位でバトンをうけたアンカーの岩田氏が２人を抜いての逆転優勝だった。コーチで引率した現ＯＢ会長の出口庄佑氏は『岩田君をアンカーに起用した作戦勝ち。トップでゴールしたときは感激しましたよ』と今も脳裏に焼き付いているシーンを思い出す。

この年ＯＢ会『六稜アスレチッククラブ』が発会。

【ダンス部】

昭和31年に泉和子さん(69期、旧神野)らが創部、33年の六稜75周年記念文化祭で、『舞踊の歴史』を公演したのが自慢だ。一時期、部員不足の悩みはあったものの、昭和38年には、現代社会の新旧の対立をモチーフにした創作舞踊『新旧の闘争』を発表している。

その後、週２回程度の練習や、他校での講習会参加が主だった。しかし昭和53年度の３年生を最後に休部となり、翌年廃部せざるを得なくなった。

ダンス部は女子のみの部で、舞踊の研究と実践で、バレーやオペラ、ミュージカル、社交ダンスなどとは異なっていたので、文化部ではなく、運動部に所属していた。

最近新体操が脚光を浴びているが、そのような競技でもなく、純粋に舞踊（洋舞）を追及していくだけに昨今の若者にとって物足りなかったのか。20年で部の幕を閉じたのは惜しい。

【山岳部】

今や、全国大会の常連
大正10年発足の山岳部

大正10年10月に『登山部』として発足した。活動が地味なだけに「ええそんなに古くから…」と、驚かれる向きに、改めてその歴史を知っていただかねばなるまい。

▽ 大正11年にアルプス登山

部の創設者は、チリヤンの愛称で親しまれた山本荒吉先生だ。大正８年に北野中学に着任。地理、歴史の教科を担当された。登山歴については聞き及んでいない。専門の学科が示すように実証家だったのだろう。その考えを具体的に発揮できる山登りに情熱を傾けられたのかも知れぬ。

11年の夏には、当時、中学生には難しいと言われていた日本アルプスの登山に挑戦。多数の中学生を引率しての登山だけに、その苦労は大変なものだったと推察する。

『六稜山岳会報』によると、参加者が多数だったため２班に分けて実施。登山部の行事と言うより学校行事の一環として行われたものだった。そのころの中学生の登山としては画期的なもので文武両道を目指した北野精神がよみとれる。

この登山の成功によって、その後毎年夏の行事として引き継がれて行く。１年生は大峯山、２年は富士山、３年以上アルプスと太平洋戦争が激しくなるまで続いた。

▽ ＯＢ会は昭和50年に結成

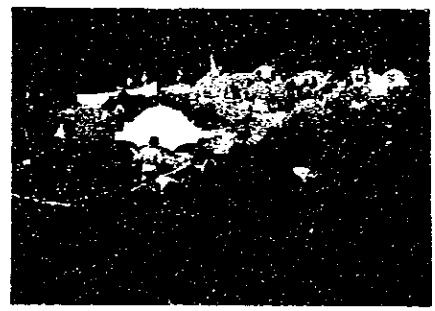
戦中、戦後の混乱期は登山どころではなかったのか、そのころの記録がほとんどない。山岳部と改称された時期も不明確で、細々と夏山登山の訓練をかさねていた。そんなこともあってかＯＢと現役との交流はほとんどなかった。

昭和42年、やっと交流のきっかけをつかんだ。寂しがり屋の山男たちは、新人の歓迎会を共催することで現役との接点をみつけた。物心両面の支援を痛感して「六稜山岳会」が50年に誕生する。

それにつれて、現役の活動も生き生きしだした。59年には女子が大阪府代表として初の全国大会に出場した。平成元年には、男子と女子がそろって高校総体に、３年には男子、４年は再び男女がペアで出場するという活躍ぶりで、全国大会の〝常連〟になりつつある。もっともこの実績、15年間顧問を務めた猿田茂先生の指導によるところが大だ。

▽ 森本氏の遭難死

山岳部にとっての痛恨事は、何といっても、有能なアルピニストだった49期の森本嘉一氏の遭難死だろう。昭和36年、大阪市大創立百周年記念事業の一つとして、挑んだ未踏峰のランタン・リルンの登山で隊長として参加。雪崩のため行方不明となった。森本氏が北野在学時の部長だった水島喜平先生は『前途有望な山男を失って真に残念、ヒマラヤの話が聞きたかった』と折りあるごとに話し、その死を悼まれている。この救援隊の隊長が54期の鈴木武夫氏だったのも何かの因縁だったかも知れぬ。



インターハイでのキャンプ設営競争

【美術部】

ＯＢ名簿に「手塚治虫」
絵画部から美術部へ

佐伯祐三(30期)・吉原治良(36期)両氏は中村堯興先生(在籍明治32～昭和８)の教え子であったが、その頃、美術系のクラブがあったかどうかは分からない。その後任の岡島吉郎先生の在職中（昭和９～41）にはクラブとして存在していた。手塚治虫氏(59期)のころは絵画部といっていたらしい。画家となった卒業生も何人もいるが、美術部に籍を置いていたかどうかも不明である。

30年前の美術部員であった岸田知子さん(78期)によると、当時も、美大めざしてひとりデッサンに余念のなかった人、時々現れておしゃべりしていくだけの人、女生徒目当てで短期的に部員を名乗っていた人などがいて、彼等は部員でなかったと思うものの、卒業アルバムの写真に写っている。部員であったかどうか、いささか心許ない。

部室にガリ版刷りのＯＢ名簿があって、そこに手塚治虫氏の名を見つけて驚いたのを覚えている。「手塚治虫」の名で、「医師」とあった。その名簿にはかなりの人数の名があったようだ。

岡島先生の退職直前で、先生自身、ヨーロッパ旅行をされたり、教師生活のまとめをしようとしておられた気配があって、忙しくされていた。

美術部の大きな仕事は、文化祭と夏の合宿、それに大阪市立美術館での高校展であった。文化祭は以前は文化部の祭典だったので、４、５教室使って展示をしていた。合宿は毎年、志摩半島の波切に行った。今は信州方面。

高校展は今もメインイベントのようだ。現在はこれに、第一学区美術展や学内展が加わっている。

美術部のＯＢ会というのではないが、中村弘先生（49期・旧職員）たち岡島先生の教え子のグループ展「ＫＡＭＥ展」が毎年開催されている。

【テニス部】

五輪銀メダリスト

六稜唯一人

柏尾誠一郎氏

手元にとどいたテニス部の資料では、明治24年の創部とあった。しかし『北野110年史』では25年に校友会が発足し、運動部は陸上と水泳に分けられ、陸での運動は陸上部に一括された、とある。してみると、庭球部と称したであろうテニス部の発足は定かでなく、創設の時期を明示するのは困難といわざるを得ない。

▽ 唯一のオリンピックメダリスト

むしろ、テニス部の歴史にとって最も重要なのは、柏尾誠一郎氏(22期)の存在だろう。というのは柏尾氏が日本最初のオリンピックメダリストで、しかも六稜人で唯一のメダリストであるからだ。柏尾氏は北野在学中からテニスを始め、活躍していたが、本格的な活躍は社会人になってからである。

東京高商に入学後、頭角を表し、三井物産では海外在勤中に数多くの国際試合に出場、素晴らしい戦績を残している。その戦績をたどると、大正4年、上海で開かれた極東選手権大会は、熊谷一弥(慶応)と組んだダブルスで優勝、9年のアントワープの第7回オリンピックでは、シングルスは2回戦で敗れたが、ダブルスは熊谷とのペアで決勝に進出、英国チームに1－3で敗れたが、銀メダルを獲得した。さらに12年のデヴィスカップで、戦後の教科書に登場したあの清水善造氏とのコンビでアメリカゾーン決勝進出を果たした。

▽ テニス発展に尽力

テニス部にとって忘れられないもう一人は片岡直方氏(14期)だ。大阪ガスの社長として関西財界での活躍はつとに有名だが、氏は在学中からテニスの愛好家だったが、何よりも氏の功績の大きいのは、日本のテニス普及に尽くされた努力だ。自らが創立した甲子園国際倶楽部に百面のコートを造り、庭球界で最高の栄誉である『片岡杯』を創設されるなどの尽力は高く評価されている。

昭和14年、日本運動記者倶楽部は、最初の体育功労章を片岡氏に贈った。

▽ 22年に全国大会で優勝

さて、戦後の活躍だが、22年には62期の山口宗男氏が全国中学大会で、優勝すると言う華々しいスタートを切った。63期の西尾雄太郎氏が全日本のジュニアの優秀選手に選ばれたのを始め、31年に松山時男氏（69期、旧姓田村）が国体出場した。その後、80期の丹羽祐治氏、90期の小若雅彦氏と続いている。

一方、女子は24年の新制高校発足と同時にスタートした。好選手はいたが、近年、特に目立った活躍をしたのは坪井美紀さん(96期)で、1年で国体に出場、全日本ジュニアのランキングプレーヤーだった。

【化学研究部】

『化研誌』発刊で再生

物象班が昭和20年の秋、有志でつくられたころ、伊藤栄一氏(60期)らは、まず化学教室にある薬品棚の整理からはじめたという。化学の先生は当時、清原・金森の両先生だった。

硫酸と何かをまぜ合わせて、発熱しビンが破裂、あわてて、石灰をかけたこともある。又、黒色火薬の実験をしてみせて、爆発を起したりした。幸い大事にはいたらなかったが、あらゆる実験に挑戦していた。

この化研の好奇心と遊び心は引継がれ、例年文化祭では、様々の研究が発表された。昭和31年当時の部長だった、稲森久彦氏(69期)は当時を振り返る。『とにかく、化研部室にはいつも誰かがいて、さながら、梁山伯の如きものだった。文化祭での、発表はあらゆる分野にわたっていた。前日から泊り込んでエチールアルコールで合成酒をつくり香り付けに十三公園の何かの木を入れたりしたが、西田聰夫先生に飲んでもらい、いけるとほめられた。実験室のガスバーナーですきやきをやり、その酒でしこたま酔払った人もいた。古きよき化研時代だった』

その後、しばらくは低滞期に入るが、例年の文化祭では相かわらず、思い思いの発表が続いている。

昭和56年度には、公害問題の研究もかねて、文化祭では淀川の水質検査の研究発表を行い注目を浴びた。

又、昭和62年は、『化研誌』を発刊。この年は渡辺直丈氏(100期)が『硫酸の三つの性質』で『日本化学会』の奨励賞を受賞。

これらの活動に対し、第3回六稜文化活動振興賞も授与された。

【物理研究部】

昭和20年秋の文化3班結成時に生れた物象班をその祖とする。平井直兄(60期)、片岡俊夫(61期)、国米惇（62期）氏らがはじめたもの。はじめは鉱石ラジオの組立てなどからはじめたという。又、平井氏は階段教室で下級生に物理のレクチュアーをした経験をもつ。クラブになって物理研究部となり、その後無線部が分離独立した時期もあったが現在は無線部はない。西田聰夫、福田博造先生を顧問に、それぞれ、思い思いの研究をした自由なグループであった。小松彦三郎氏(66期)などは、『あまり、クラブとして活動した記憶はない。先輩にはその後、物理学に進まれた方も多いが、私のあと部員が一人もいなくなったと思う。』一時低滞期を経て、能勢功一氏(75期）らは『ホーバークラフトの研究と称して文化祭にオートバイのエンジン浮揚の実験をやったもの、音が大きく講堂の発表が聞えぬとのクレームがついた。それでも何かやっているという実感はあった』と語る。現在の物理研究部は、コンピューターを中心にした様々の研究が時代を写して人気があり、パソコンのオリジナルソフトも次々と発表している。又、アマチュア無線局も再び活動を開始した。ＯＢも創立期の平井氏を中心に東京理研の会をつくり、年1、2回の会合をもっている。

【応援団】

『主役は生徒』が応援団の指針
市岡との復活定期戦で組織化

組織された部としての記録こそないが、定期戦や全国大会などではリーダーが指揮した組織的な応援は戦前から行われていた。『創立110周年誌』によると、昭和9年11月に第2応援歌『淀江の水』成る、とある。また、作家の梶井基次郎氏も応援団のリーダーで「弁慶」の愛称で呼ばれていた、との記録がある。してみるとかなり古くから存在していたようだ。

北中の人文字もあざやか鮮やかな応援風景

▽ 組織化は昭和31年

現在のように部として組織化されたのは昭和31年だった。きっかけは大正11年を最後に中断されていた対市岡との野球定期戦が復活した30年、柔道部員がリーダーとなって声援を送った応援だった。北野が"ひとつ"になった感動を味わったからだ。当時2年生だった69期の菅正徳、渋江克彦両氏らが中心となり応援団をつくり、翌年、正式に部として発足した。

部の活動は、運動部の対外試合の応援と校内行事の手伝い、運動各部間の連絡調整、応援団誌『淀江』の発行などである。41年夏には、高校野球府予選の応援で、マナーが良いと表彰され『朝日新聞』に紹介されたのも自慢の一つだ。その前年に女子部員が誕生した。

▽ 忘れ難いバス事故

応援部にとって忘れ難い思い出は、32年7月30日の事故だ。藤井寺球場での対清水谷高校との準決勝で、チャーターしたバスが大和川堤防下の田んぼに転落、多数のけが人をだしたことだ。学校の許可を得ず部が勝手に手配しながら、事後の処理すらできず、負傷者や学校に迷惑を掛けた、と当時の部員は今も反省の気持ちでいると言う。それだけに、部の活動は『主役は生徒』という指針が守られている。

▽ 花園のラグビーは誇り

62年の暮れ、ラグビー部の全国大会での快進撃は、応援部を再生させた。11月の大阪府大会優勝の日から、全国大会への応援態勢を整備にかかった。OBが北野に足を運び始めた。現役リーダーとの合同練習、講堂での応援歌の練習と部が生き生きとしてきた。その成果がオール北野による63年元旦の花園フイーバだったのだ。花園ラグビー場開設以来の満員札止めとした。

花園のスタンドを埋め尽くした大応援団を、現役とOBが声をからし、歓喜の渦中に身を置けたことは応援部の誇りだ、といいきるOBたちだ。

が、OBらにとって淋しいのは、毎年10人前後いた部員が平成4年にゼロとなったことだ。ひとのために何かをすることに価値を見い出し、喜び悲しみを共にすることに生きがいを持つ部だけにその思いは深刻だろう。

しかし、OBらは『存続が困難にせよ、ひとたびことがあれば、北野のもとに結集できることを信じている。花園を忘れない』と意気軒高だ。

【地学研究部】

日本一のアマチュア天体望遠鏡

昭和20年秋の物象班では、伊藤栄一氏(60期)らがまず気象観測をスタートさせた。校舎屋上東側に風速・風行計をとりつけ、記録を取っていたが、戦後の混乱期で、どろぼうが入り、持って行かれたりする。

この流れが、クラブになり、地学研究部になる。30センチの大反射望遠鏡は、アマチュア界では日本一といわれ、天文マニアの地学部員が、部員総出の組立てをした。本体は直径50センチ、長さ2メートル、重さ100キロあった。

当時の部員であった北橋忠宏氏(69期)は『昭和31年の6月には、火星の地球大接近があって、通常は許されなかった授業期間も望遠鏡を据え付けたまゝで、土曜日は夜遅くまで火星のスケッチに精を出した。有名な運河の模様など、どう思い入れをしても見えず、全体に少し濃淡があるかなあという程度であった。よく知られた秘話だが夏の夕暮れには1キロ離れている淀川堤に次々現われる男女の二重星を観測していて、顧問の西田先生にみつかった。像が上下逆さまになるのが欠点であったが、何しろ風にそよぐ葦の葉の一枚一枚がみえるように感じた程、鮮明な像だった』と語る。

しかし、この天体望遠鏡も今はない。平成3年の文化祭には、15センチの天体望遠鏡を自ら作成したり、太陽黒点観測の研究結果を発表したりして天体への思いを続ける一方では、富田林市の石川河床足跡化石の発掘に参加するなどユニークな研究も続けている。

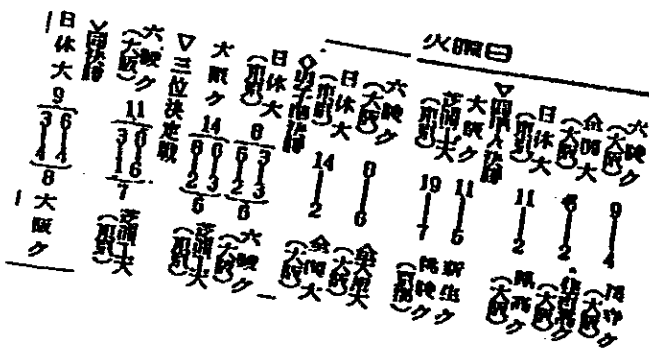
【ハンドボール部】
ハンドボール界に大きな足跡
六稜クラブで全日本の3位も

昭和15年、加藤波夫先生が『文武両道』をモットーに創設された送球班が、現在のハンドボール部である。第2次世界大戦の激しくなった一時期をのぞいて活発な活動が続いた。昭和17年の3年生が大阪大会で早くも優勝、翌年の秋季大会にも優勝と順調な滑り出しだった。

▽ 天高定期戦は最古の対抗戦

運動各部に盛衰があるのは、どこも同じだが、この部には誇るべき輝かしい歴史がある。対天王寺高校との定期戦だ。日本のハンドボール競技史上、対抗戦としては一番古く、しかも長く続いているのだ。15年の大阪中学校選手権大会の決勝戦で対戦したことが切っ掛けで、定期戦が始まった。戦争による中断はあるが、35年ごろまでは大阪のトップレベルにいた両校は、良きライバルとして競い、この定期戦は各方面から注目された。

91. 7. 21. 北野H・B・C創部50周年記念パーティー



▽ インターハイで3年連続ベスト8

26年の第2回全国高等学校ハンドボール選手権大会を皮きりに3、4回と3年連続大阪代表として出場した。特に4回大会では優勝候補の前評判も高くシードされたが、準々決勝で敗れベスト8に終わった。ちなみに2、3回大会もベスト8だった。

29年12月、大阪府立体育会館で行われた第1回全日本総合室内ハンドボール選手権大会には、OBと現役の混成で『六稜クラブ』を結成、社会人や大学チームと対戦した。準決勝で大学ナンバーワンの日体大に、少差で惜敗したが、3位決定戦では芝浦工業大を破り3位となった。

こんな素晴らしい戦歴を持つ部だけに、当然の事ながらOBは、ハンドボール界に大きな足跡を残している。56期の滝野博氏は京大のハンドボール部を創設、早稲田大、関学大、神戸大の全盛期には、北野OBが主力選手として活躍した。岡山県のハンドボール協会会長は58期の近藤正次氏。

かっての活躍に比べ、このところ全国大会などへの出場はないが、53年に誕生した女子部は平成3年に北ブロックでベスト4に入るなど徐々に力を付けてきている。

▽ 忘れ得ぬ平石先生の指導

ハンドボール部にとって忘れることのできないのは、平石亮三先生のことである。在職中の30有余年、顧問として指導、とりわけ戦中戦後の苦しい時期に、部員に対し物心両面の援助を惜しまれなかった。東北なまりの独特の語り口でだれかれなしに接し、厳しかったが人情家で、温かい先生だった。

創部時のキャップテン志賀裕氏(54期)が病床に伏されたとき『オレが分かるか』となんども手を握り返し『教え子が先に死んではいかん』との、先生の人柄そのものをしめす話が語り継がれている。

先生が亡くなられてもう9年経つ。

【漫画研究同好会】
手塚治虫氏を目指して腕磨く

昭和51年、杉山由紀(91期)、早崎起代子(92期)さんらによって始められた。

会員は女子が多い。各自、自分の原稿イラストを持ち寄り批評し合う。批評会は第一学区の、桜塚・豊中・豊島などの他校とも合同で行うこともある。

『大先輩に手塚治虫氏がいることもあって、「華やか」で、「優しい」画風の会員は少く、壮大な劇画づくりを目指している人が多かった。当時の漫研には「巡回ノート」なるものがあり、自分のイラストや、ねたを書いて次にまわすというものでなかなかお会いできない先輩方のイラストに触れられる貴重なノートだった』（元井康賀さん(95期)。

昭和60年には、篠塚勉氏(99期)が第1回広島国際アニメフェスティバルに『風』を出品、36ケ国451点の中から選ばれデビュー賞を受賞した。この快挙及びその他の活動に対して、第1回六稜文化振興賞が授与されている。

活動の発表場所として、オフセット年誌『逢魔が時』。コピー誌として、『STAY FREE』『天真爛漫』『破天荒』などがある上に、文化祭では、イラストの発表が大仕事である。

OB会を組織しているわけではないが、川北論氏(105期）が連絡係として、こまめに世話をしている。

【演劇部】

男優不足が悩み

創設期と逆の演劇部

昭和22年、八木繁・古川哲夫(62期)氏らが演劇部をつくり、戦後の新劇運動の波に乗ろうとしていた。本格的には昭和23年、大阪府下の演劇コンクールが大手前会館で開催され、三好十郎の『蛍』を上演、脚本では主人公は老婆だったが女優がいないので老爺にした。これは反戦劇であったが、表彰を受けた。これが、演劇部の初の対外活動であった。この頃はまさに左翼演劇の時代で、芝居をプロパガンダの手段にするための論争が繰り返されたが、徳永行平・宍方謙二・村岡有尚(63期)、武久慎・中川輝夫(64期)氏らは、創作脚本による主張に力点をおく方向に流れを変えた。

24年のコンクールでは『窓』(徳永行平脚本)が優秀賞を授賞、大阪の新劇界でも評判になった。

当時は、前進座が共産党になり、商業演劇からしめ出され、ドサ廻りをしていたが、昭和24年、河原崎国太郎グループの前進座を招き演劇部主催により講堂で『ヴェニスの商人』を上演した。

よく学校の反対がなかったものだと徳永行平氏(63期)は述懐する。

しかし、この演劇華やかな時代もしばらくすると沈静化し、一時は休部状態になるが、昭和30年、梅沢喜八郎氏(69期)らが再興、その年の文化祭に『三年寝太郎』を上演した。

又、大阪府下高校演劇大会に真船豊の『寒鴨』を演じて入賞する。その時の役者の一人が現在演劇界で活躍している中田浩二氏(69期)である。

その後も休部、再開を繰り返したが演劇の火は消えず、本年の文化祭では女子ばかりで『奇跡の人』を上演、創設期とは反対の男優不足に悩んでいるのが現状である。

【園芸部】

昭和30年に再生

昭和6年、新校舎へ移って早々、博物(今の生物)の大須賀嵐先生が屋上を利用して園芸部を始め、当時の新聞にも紹介されたという。その後もテニスコートに場所を移して活動は続いたが、戦争とともにいつのまにか消滅した。

世の中もようやく落ち着きを見せ始めた昭和30年、当時の2年生小寺範生氏(69期)ら、顧問に国友正先生を迎え、同好の士が集まり園芸部を発足させた。幸い多数の熱心な参加者と、生徒会、教・職員の支援に恵まれ、新参のクラブとしてはきわめて順調なスタートを切った。

実績作りと夏休みの芝生の手入れを始めた。昼間を図書館で過ごし、夕方から水やりを始める毎日だった。校舎の周辺は草むらになっていたが、そこから花壇の残骸を掘り起こして翌春にはチューリップなどを咲かせるところまでこぎつけたという。

31年春植えの花は、目立つようにと食堂への通路のわきに新しく花壇を作ってカンナやマツボタンなどを植えたが、夏休みの間に盛りがすぎてしまい、宣伝効果はいま一つだったようだ。文化祭にもこの年から参加、時期が花の少ない6月だったので、花を集めるのが一苦労だった。結局は春の花の残りで間に合わせたようだった。

小寺氏は『校内の様子も一変してしまいましたが、今でもクラブ活動が続けられている。当時と今とでは花や緑についての状況はまるで変わっていますが、自分の手で緑を育てる喜びは、今も同じなのでしょう』と話している。

【ＥＳＳ部】

英語がしゃべれる興奮からはじまった

世は英語の時代であった。敵性語が変じて英語をしゃべる人が、時代の寵児となった。

平川唯一の『カムカム・エブリボディー』の時代である。

北野でも流暢な英語がもてはやされる時代となった。中真一氏(62期)はＥＳＳ創設期を語る。『英語をしゃべるということは、戦争が終ったということを実感することだった。アメリカ帰りの佐藤譲君(62期)を中心にして、英語をしゃべろうという気分があふれていた。学校内のスピーチコンテスト、英文毎日主催の高校英語弁論大会など、英語をしゃべることに熱気があった。

水鳥喜平先生も格別の熱意でＥＳＳを指導して下さったし、進駐軍の通訳をされていた大原一夫先生の発音にはうっとりした。』

佐藤譲氏(63期)は高校英語弁論大会に必ず入賞する代表選手であった。女性ＥＳＳ部員の二谷(旧長沢)世津子さん(63期)は『コンテストの前は、屋上で早朝練習をしたもので、葛西先生が聞いて下さり終るとおせんべいをくれた』と懐しむ。

文化祭では、宝塚歌劇団で衣裳を借りて『ヴェニスの商人』を古英語でやったそうである。

北野ＥＳＳと『ヴェニスの商人』は切っても切れない演目で、昭和29年にも、文化祭でこれまた宝塚からの衣裳を使って上演、好評を博したと、藤洋作氏(68期)は語る。

このころのＥＳＳは全盛期で、いわゆる英語の使い手が輩出している。67期の土井憲一氏によれば、『部ではもっぱら英語で話し、高校弁論大会では出れば入賞だった。京都の英語弁論大会で入賞したとき、平川唯一先生が審査員で、入賞のお礼を平川先生のＮＨＫ講座のおかげと英語で言ったところ随分喜ばれた。また、アメリカ文化センターを拠点にして他の高校ＥＳＳとの交流もあって充実したクラブ活動であった』。

その後の活動も、文化祭の英語劇、スピーチコンテストの出場が中心になって、続いていくが、国際化に伴って来校するアメリカ人との討論会をもったり、ホノルル市長杯全日本青少年英語弁論大会に内海由美子さん(95期)が、全関西高校英語弁論大会に橋本美佳さん(96期)が参加するなどの活躍がみられる。

【ラグビー部】

実績と伝統を誇る

創設70年を迎えたラグビー

昭和62年、大阪府代表決定戦、対牧野高校

大正12年の春に産声を上げ、今年創部70年の記念すべき年を迎えた。この間の輝かしい戦績は後述するが、『ラグビー部50年史』より40期の杉尾太一郎氏の手記を引用する。『卵形のグロテスクなボールに魅力を感じて集まった。とにかく15人以上集まり初めてユニホームを着た。真紅と白の横縞であった。が全員揃って総合的な練習はなく、原書を訳しルールを覚えながらの練習だった』

記念すべき最初の試合は12年11月19日、対関大戦。善戦せしかど体力の差如何ともする能はず0対6で敗れる。

▽ 全日本の名選手を輩出

13年1月19日、北野校庭で第1回の天王寺との定期戦、3対14で敗れるものの大阪で初めての中学対抗のラグビー試合だった。この定期戦、昭和8年の初勝利まで9連敗。再び杉尾氏の記『北野ラグビーは強いという噂は未だ耳にせぬが、とまれ日本的な名選手伊藤、岩前らの天才を世に出した北中ラグビーも ……』（昭和8年6月記）と創設当初は成績は余りパッとしなかったようだ。初代キャプテン伊藤次郎氏(39期)、岩前博氏(40期)はそれぞれ慶応、京大で活躍、北中ラガーの誇りだったのだ。

▽ 大阪の“早慶戦”

天王寺との定期戦は、戦争中の18、19年の2年間こそ中止されたが、既に69年の歴史を刻む。特に7年から花園ラグビー場で行われるようになって、大阪での“早慶戦”と称され戦員、生徒が総出で応援して、大阪スポーツ界の名物になった。が、30年の定期戦で、左フロントの野本武氏(68期)が試合中に不慮の死を遂げたことは忘れられない出来事だった。以後、公式戦では背番号1を欠番にして試合に臨み、氏の死を悼んでる。

▽ 16年の全国大会で優勝

ここで、その輝かしい戦績に触れると、大正14年、1回戦で京都一商に完敗したものの全国大会に出場、昭和13年度から16年度まで4年連続全国大会へこまを進めた。14年度の大会は準決勝で秋田工業に抽選で敗れベスト4、16年度は報国団蹴球班の名で出場の変則全国大会（全国大会が禁止され、ラグビーは関西大会）で天王寺を破り優勝する快挙だった。

▽ 花園で北野旋風

戦後は、野球や陸上、ハンドなどの活躍が目立ち、鳴りをひそめていたが、32年に7人制の関西大会で準優勝、34年、39年の全国大会大阪予選に決勝戦まで進むが、惜しくも敗れ、全国大会へであと一歩のところで涙をのんでいた。復活ののろしは、59年だった。この年、春の大阪大会で優勝した。勢いはつづいた。62年の春、大阪地区予選で優勝、全国大会予選も勝ち抜き、全国大会出場を果たしたのだ。『名門北野復活、46年ぶりの花園へGO』と新聞は報じた。1、2回戦と勝ちすすむごとに、関西のスポーツ各紙の一面は『文武両道、花園に北野旋風』との見出しが踊ったのは記憶に新しい。強豪伏見工に敗れたがベスト16。翌年春の近畿大会でも3位の好成績を収めている。

【弁論部】

校友会主催で明治30年10月、初の討論会を開いたのが弁論大会のはじまり。

明治34年の演説会では『印度人シヨウデー氏も英語演説をなす』の記事もある。

大正14年校友会組織の改正で弁論部が学芸部より独立し、部としての活躍が目立つようになる。大正15年には神戸高商主催の全国中等学校弁論大会に岡田喜雄氏(40期)が出場。50校の代表選手の中で『白鳥の叫び』の演題で優勝。この大会には三木武夫元首相も出場していたという。

しかし、戦時体制に入るにつれ、弁論は次第に下火になり、部活動も停止となる。

昭和33年、河原剛先生を中心に有志が再興し、その年の11月第1回優勝弁論大会を自治会と共催、男子15名が参加、講堂は満員の盛況で、『死刑は停止してみること』の題で弁じた河島洋征氏(72期)が優勝している。

このころの弁論部は機関誌『評論“黎明”』を発行し評論活動も活発であった。

しかし、昭和40年代に入って再び下火となって自然消滅。

【合気道部】

昭和36年、書道の阿倍俊一先生を指導者・顧問として発足。すでにOBは380名を数える。

同部はいわゆる対外試合で競うということはしない。活動の中心は日常の稽古、文化祭の演武などが中心であるが、その中から徐々に校外交流も生まれはじめ、6月に行われる関西高等学校合気道連盟主催の合同稽古に参加とか、本年第10回を迎える関西高等学校合気道演武大会に参加するなど、その活躍も巾広くなってきた。指導者と仰ぐ阿倍先生は合気道10段で、斯界にその名を知らぬ人はなく、今でも、先生個人の道場での指導を受けている。昭和56年、高岡靖弘先生（78期、北野書道科教諭、合気道初段）が現在顧問として、指導にあたり部員数26名（男子15名、女子11名）の大きな部であり、卒業時には、普通むづかしいといわれている初段位を得るものが多いそうだ。毎年7月下旬には、吹田市にある天之武産(アメノタケムス)合気道塾道場で4泊5日の合宿を行い、これにはOBも参加しての交流稽古が行われる。

北野の武道・柔道・剣道を指導してきた阿倍先生の本来のイズムが今、合気道に脈々と受け継がれている。

【器械体操部】

戦後初の第１回国体に出場

イ競技では４年連続全国優勝

正確な創部の時期は定かではないが『目で見る北野80年史』には、昭和７年６月25日に第一回校内器械体操競技大会の写真が掲載、延べ151人が参加、とある。また、110年史には『器械体操部、全国大会６位』との記述、そうしたことから判断すると、10年前後には創部された、ものと思われる。

校内競技大会が行われていたほどだから技術水準もかなりだった、とみえ、14年には明治神宮国民大会（いまの国体）に参加している。伝統の部である。戦後すぐの21年には、第１回の国体に北野運動部のトップを切って出場した。北野スポーツ復活の幕明けを告げるものだった。

国体出場時の主将吉田東輝氏(60期)の話で再現する―。選手は吉田氏のほか、山田文一氏(60期)、仙波華夫氏(61期）の３人。府下大会で優勝していたうえ、近畿開催のため会場は西区のＹＭＣＡ体育館とあって、緊張はなかった。北野の体育館が戦争で焼失したため、ふだんの練習もＹＭＣＡを使っていたので、勝手が分かっていた。床なども穴が空いていたりしたが、むしろ楽な気分だった。

とはいっても、さすがは全国大会で、レベルも高く、鉄棒、跳び箱、マットの三種目で争った競技では山田氏の６位が最高で、吉田氏は10位。団体は10位以下だった。学校では部室の前の黒板に成績が発表され、生徒らが立ちどまって見ていた、という。

付け加えれば、この年の西日本大会では、団体と個人の吉田氏が優勝するという栄冠に輝いた。

▽ 30年前半は大阪体操界をリード

それから10年。30年代前半の活躍は際立っている。近畿地区では、男女とも、個人、団体は常にトップレベルを維持、大阪の体操界のリーダー役を果たしていた。

当時、体操競技は鉄棒など５種目のほか、特別種目として団体徒手競技、インディアンクラブ競技などがあった。長崎県で開かれた33年のインターハイにはインディアン競技で久保良三氏(71期)が、優勝、この種目、四年連続の全国制覇という偉業を成し遂げた。最初の優勝者は30年の伊藤誠三氏(68期)、次いで69期の宮下繁氏、70期の黒田正明氏と続いていた。また、32年のインターハイでは小川達二氏(70期)が、跳馬などで好成績を収めている。

27年から38年までコーチとして指導した中沢貞岑氏(64期)は『強い、ということもあり活気があった。連日のように先輩が来て、指導するなど物心両面の支援が、活気になっていたのでしょう』と。長崎で果たした４連勝も、そう驚かなかった、という。むしろ５連勝が懸かった34年の大会は『クラブを落とし、優勝を逃したのが悔しかった』と振り返る。その競技も新体操に取って代わり、38年以降はなくなった。

第１回校内器械体操大会(昭和７年)

▽ 目立つ女子の活躍

一方、女子は新制高校発足と同時にスタートしたが、その活躍にめざましいものがある。29年の近畿大会優勝をはじめ、27年から３年連続のインターハイ、28、29年の国体に出場した紅谷富美子さん(67期、現鈴木)の活躍や28～30年のインターハイ出場の清水キエ子さん(68期、現中沢)、32年に出場の山下圭子さん（70期、現京田）らは部史を飾る名選手だった。

36年に、大西幸成氏(74期)がインターハイ出場し、後続の優秀な現役らも、体操王国を築く清風高校の台頭の前に歯が立たず、全国レベルの大会への出場を果たしていない。が、『北野体操ここにあり』の成績に、ＯＢの期待は大きい、ようだ。

【生物研究部】

活発なＯＢ会、部誌「ルーペ」発刊45周年

終戦の秋、運動部の活動再開をみて、地歴・物象の二班とともに生れたのが生物班である。八木宗三郎氏（60期）を班長に活動がはじまった。その当時から蜂の研究では日本一であった岩田久二雄先生が顧問格として指導。しかし試験用アルコールを手に入れるのもままならぬ時代で、ザリガニの解剖とか、研究合宿と称して能勢にキャンプしたのが主な活動であった。しかし広岡仁夫氏(61期)になるとペニシリンの培養で専門医をおどろかせたり、木船悌嗣氏(63期)のころには、文化祭で『にわとりの卵の裸培養』を発表、高校生ばなれの研究と朝日新聞にとり上げられたりし、その活動は内外に注目される。この伝統は、その後も続き、現在の生物研究部の『淀川の水鳥の研究』にまで続く。

六稜文化振興賞には毎年候補として名が上り、第１回の個人賞に八木剛氏(99期)が『大阪市西淀川の珍しい昆虫二種』と『スズメノヒエ類の病害に関する研究』が受賞しており、その后も『淀川の水鳥の研究』に助成金が出ている。又、部誌『ルーペ』は昭和23年発刊。その後、途絶えることなく今年発刊45周年を迎える。

この生物研究部はＯＢ会がしっかりしており、八木氏(60期)、木船氏(63期)を中心に、ＯＢ会では60人以上が集り、現役を招待し、かつ援助もしている。今年は北野創立120周年に合わせてルーペ発刊45週年記念号を出そうと世話人の荒川良氏(85期)を中心に企画が練られている。

【卓球部】

年２回の六稜杯争奪戦開催
卓球便で結ぶＯＢと現役

ほかの多くの部と同様に新制高校がスタートした昭和23年の創部。45年の歴史を持ちながら戦績面で殊かに華やかなものはない。が、ＯＢ会のまとまりの良さと現役との交流の緊密さは、他の部の追従を許さない、というのが自慢だ。

▽ 身近な卓球便

特に、年二回発行する会報は〝卓球便〟と称し、会員諸兄姉の近況、現役の戦績などが満載、このためＯＢ諸氏にとっては宅急便より身近なものになっている。

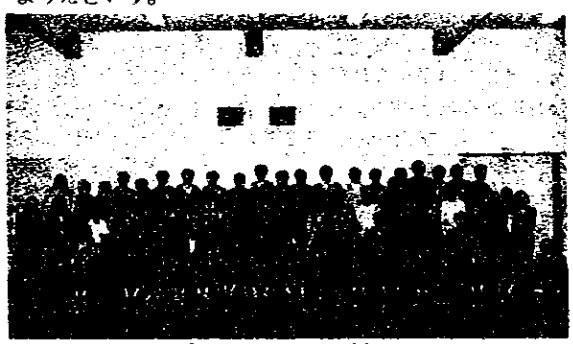
昭和63年の『六稜卓球部ＯＢ会報』（創部40周年記念号）には

今年も、４月の初めに一通の茶色の事務封筒に入った郵便を受け取った。その封を切らなくても中には一枚のはがき、青い振替用紙、それに上質紙にガリ印刷の『卓球便』が入っていることが分かる。

先ず告知の欄を探し当て六稜杯の開催日を確かめるのだ……。

との投稿があるほどだ。

その六稜杯だが、創部30年を記念して、当時の顧問だった薬師寺春雄先生らの尽力で創設された。趣旨はＯＢも含めた北野卓球部の親睦をはかるとともに、現役の励みにというもの。毎年春と秋の二回、現役とＯＢが技を競うのだ。当然のことながら女子の部の優勝者にも六稜杯が授与される。大会後の懇親会は〝卓球ファミリー〟そのもので、試合より懇親会目当てのＯＢも多くなったようだという。



'93年３月27日の六稜杯より

▽ 球探しにひと苦労

そんな和やかな卓球部だが、卓球便から歴史を拾ってみると、昭和23年の１学期、同好のなかまが集まって始めた。当時は、台すらなく、空き教室のつくえのうえに板を渡し、にわか卓球台でピンポン球を打ちあうという程度のものだった。床は穴だらけのうえ、窓ガラスはわれ放題だったので得意のスマッシュが決まっても、穴ぼこに入ったのや屋外に飛び出した球探しに練習より神経を使っていたという。

24年には正式に部として発足、予算も付いた。翌年の府大会個人戦で早くもベスト16に斎藤信義氏(63期)が入った。が、練習場こそ旧図書館の２階に確保できたものの床はコンクリートでボコボコ、加えて窓ガラスは破れたままの悲惨なもので、一向に成績は上がらなかった。が専用の練習場とあって、部員は練習に没頭した。

その成果が表れたのが31年から33年にかけての活躍である。とりわけ69期の小林力三氏は、国体出場こそ逃したものの、府予選でベスト４に進出した。その後女子が49年に、大阪府のベスト８になり、京阪神大会への出場や北摂大会の優勝が続いた。最近では平成３年に男子ダブルスで近畿大会に出場したのが光っている。

最後になったが、この部には関東支部があることを付記せずにはいかない。48年に東京周辺に住むＯＢらで結成、港区の区民大会に「六稜クラブ」の名で出場、団体の二部で２位、個人セミシニアで田中康彦氏(73期)が優勝するなど東京にも「六稜」の名を広めていることだ。

【HI・Y部(聖書研究会)】

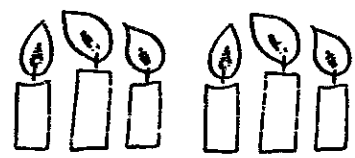
聖書研究からスタート

ハイＹの名称は“High School YMCA” からきたもので、名称が示すようにＹＭＣＡによって興された全国の高校生によるキリスト教クラブ活動である。64期の大谷遷氏が昭和25年に呼び掛けて始めた聖書研究会が、部の前身で、26年に高月章而氏(65期)の手で正式にハイＹ部として発足した。顧問は雫石鉱吉先生。

活動は聖書の勉強会が中心。奉仕も活動の一環で、辻本嘉助氏(68期)は『放課後に便所掃除をしていると「おまえら何してんね」と言われた』と話すそんな奉仕もあったのだ。

当時の文化祭では、キリストの生涯や伝道者パウロの伝道旅行を地図や絵に描き壁に掲げたのをはじめ、聖書、聖画などの展示、さらに講堂での賛美歌の合唱だった。

『北野 100 年史』によると、27年からハイＹの名が登場、32年に21人、34年38人の部員がいたと記録されている。活動が活発だったことがうかがえる。昭和38年を最後に 100 年史から名前が消えている。43、44、45年と、『聖書研究会』の名称が見られるが、その後は激しい学生運動の荒波にのまれたのか、その名も消え、自然消滅したようだ。



【柔道部】

道場に『自他共栄』の掲額
米国と交流する北野柔道

柔道が正科として採用されたのは明治27年4月である。が、部として活動を始めたのは、ずっと後だ。昭和8年に出された『六稜柔友会設立通知書』によれば、大正14年に磯島卯之助氏(24期)らの尽力で、結成されたようだ。そして翌15年には柔道の創始者、嘉納治五郎氏が『講道館の事業と目的』と題して北野で講演している。

▽ 再発足は昭和25年

同通知書には『六稜柔友会より逸材を輩出したいものだ』とあり、その会員名簿には、柔道部出身者、部員合わせて70人余の名前が掲載されている。その後、敗戦まで対抗試合などの記録はなく、活動の様子が明白でない。敗戦の昭和20年、占領軍の政策で、学校柔道は廃止され、柔道部は廃部となった。

25年に、柔道部がやっと再発足した。当時の顧問は後に京大人文研所長になられた漢文の福永光司先生と英語の田中博先生で、8人の部員が戦後1回の柔道部卒業生となっている。

29年に、最初の興隆期が訪れ、古賀、大村、由利の三氏を中心に柔道部の一時期を画し、特に古賀陸生氏（68期）は国体に出場する強者であった。

▽ ニュージャパン道場と北野

再発足した柔道部に大きな意義のある道場がある。大阪市東区のニュージャパン道場だ。

昭和30年に、対天王寺高校との定期戦が始まったが、その記念すべき対抗戦の道場となったのが、ニュージャパン道場だった。大阪府大会等と違って対天高戦は、柔道部生活で最大の情熱を傾ける試合だけに、この道場の存在は忘れ得ぬものになっている。

また、昭和19、20年にかけて本校柔道教師を務められ、戦後、大阪府警の師範だった小川敬一先生との出会いもこの道場だったのだ。

昇段試合での再会をきっかけに70期の佐野信三主将の熱心な懇望によって北野での週一回の指導が始まった。全日本選手権で準優勝の経歴を持つ師の指導は合理的で、しかも、柔道の本質を全身全霊で教えるというものだった。成果は、昭和33年に花開き、2月の大阪府高校学年別新人大会で1年優勝、2年3位と好成績を収めた。さらに5月の第12回府民体育会では団体優勝した。

▽ 進む国際交流

北野道場には『自他共栄』と、嘉納治五郎の筆による書が掲げられている。大正15年の講演で嘉納は『自他共栄は相助け相譲ることである』と述べている。

顧問の篠原芳雄先生が、65年に柔道指導のため、米国シアトルのケントウッド高校に行き、交流を深めた礼にと校長のウイルソンより寄贈されたものだ。

平成3年、OB会が中心となって校長夫妻を日本に招待した。昨年は2人のケントウッド高校生が来日、今年は4人の部員が渡米、交流が続いている。又、今年ケントウッド高校柔道部出身であるクリントン氏が来日、京都で英会話学校の教師をしながら本校OBと柔道の修業を続けている。

【映画研究部】

ホームビデオの普及で変化

組織だったOB会がなく、創部がいつかは不明。昭和40年代前半までは高校生向きの映画の発掘が中心で、映画の割引券を配ったり、ポスターのを掲示だった。文化祭では、16ミリフィルム映画を借りてきて上映した。

その後、部に8ミリ撮影機や映写機・編集機が購入され、ドラマ『何故』を制作、文化祭で発表。体育大会の記録映画も作った。

40年代後半に大手前高校や東淀川高校など他校映画研究部との交流も。活動は、シナリオの研究、新聞掲載の映画評などを切り抜き、スクラップブックに集め、互いに感想を述べあったりもした。機関誌「MOVING PICTURE」を発刊、他校機関誌との交換も。

昭和50年は、大変苦しい戦いの始まりであった。二重写しのできるカメラを用い、特撮技術や演出に凝るなどした。「映研の春」（昭和56年）は、その頃の代表作である。おそらく映研部史上初めての合宿が昭和57年8月ロケーションを兼ねて瀬戸内海に面した香川県五色台で行われた。映画「いないないばあ」を撮影。少しとぼけたひょうきんな主役を好演した西田恭之氏(96期)は、西田シャトナーとして劇作家を目指し、その後同期生小林善之氏らと劇団惑星ペスタチオを旗揚げ、関西で年2回ほどの公演をしている。

昭和60年代から映画研究部の8ミリ映写機にもトーキーサウンドの時代がやって来た。必要なシーンで、納得がいくまで何度も録音し直すことが出来るようになった。しかし、まもなくホームビデオ時代、現像不要、撮影したシーンがすぐに確認できる。音も同時に記録される。フィルムをスクリーンに映写して楽しむ時代は過去のものとなってしまった。

同時に映画研究部も変化しつつあり、今また映画の原点に戻ろうとしている。

【音楽部(オーケストラ・コーラス)】

日本最古の高校オーケストラ
創部が昭和６年の音楽部

音楽部の創設は昭和６年にさかのぼる。昭和60年にオーケストラ部とコーラス部に正式に分離した。オーケストラ部のＯＢ会は六稜楽友会、コーラス部のＯＢ会は稜声会。それぞれ活発に活動をしている。

高校にオーケストラ部があるのは珍しく、しかも、日本最古ということで、その誇りは高い。六稜楽友会の会員は現在約700名。現役生との交流も盛んで、毎年春に楽友会フェスティバルを開催し、同じ舞台で演奏している。今回の120周年記念音楽会の演奏を一手に引き受け、北野オーケストラ部・六稜楽友会の実力を世に示そうと、練習に余念がない昨今である。

コーラス部は、関西合唱コンクールで昭和53年に銀賞、55年に銅賞受賞の実績を持つ。稜声会は、現在307名の会員を擁する。

「日本一の歌好き集団」を自称し、会長・会則などはないが、とにかく集まって歌おうということで、毎年夏の例会には、現役を含めて100名近くが参加するという。その強い結束力は、全会員の自負するところである。今回の記念音楽会の六稜合唱団では、歌う方の中心となっている。

２年前に部史『わが北野コーラス部』を刊行した。

両部ともにＯＢ会がしっかりしていて、部史や名簿も発行されているなど、文化部にあっては珍しい存在といえるだろう。

楽友会会長の野口藤三郎氏(53期)は、「組織なんて、なかったんだよ」と。しかし、今回の行事を機に生まれた組織力であったにせよ、これは両会にとって未来への大きな財産になることは確かである。

【放送部】

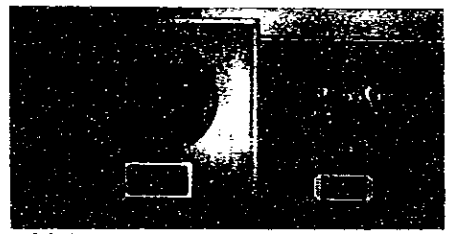
校長室の片隅でうぶ声

さわやかに流れる校内放送に一瞬、耳を奪われた記憶の持ち主は、かなり多いのではないだろうか。創部は昭和26年と、40年を超える活動歴を持っているのだ。北野高校100年史によると、当時は校長室の片隅に仮の放送室がつくられ、緊急時を除いて昼休みと放課後に校庭に向け、放送していた。

29年、民間放送が始まった。新日本放送（毎日放送）主催の第１回高校放送劇の出演校に指定されるという華々しいスタートぶり。部室と放送室が設置されるのにそう時間がかからなかった。昼休みの校内放送は今も続けられているが、最近では音楽やニュース、映画の紹介、それにラジオ小説を流すなど盛りだくさんな内容となっている。

ながい歴史の中で、『全国高校放送コンテスト』の入賞もあるが、昭和63年４月にはＫＢＳ京都放送の、全国の高等学校を対象にした作品参加番組『こちら青春放送局』で奨励賞、脚本賞を受賞、続いて平成元年には全国100校参加の中で優秀３枚の一つ選ばれた。

ＯＢは約250人で、ＮＨＫや民間放送などのプロの道に進んだ人も多く、現在ＯＢ会の結成を目指している。



全国高校放送コンテスト入賞盾
（昭和63年度・平成元年度）

【新聞部】

報道の自由は１号から

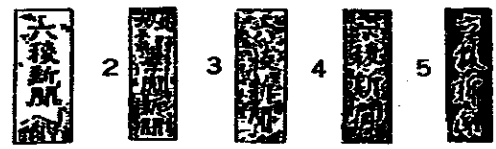
終戦後、教育の民主化の一環として、軍政部は学校新聞の発行を奨励したようだ。当時の浜田校長は、級長クラスの人達に新聞部の創設をうながし、故 宮住 敏（60期）、赤松英幸(61期)、原寿治(62期)氏らが21年秋に結成、顧問に国漢の平田泰雄先生が就任した。同級生の父君に朝日新聞編集局長信夫韓一郎氏がおられ、浜田校長が引卒して、同氏を訪問、新聞のつくり方を丁寧に教った。そして翌昭和22年２月１日、六稜新聞第１号が発刊された。顧問の先生は、北野の新聞として恥ずかしくない文章をというチェックだけで、記事の内容には一切タッチされず、部員は自由に書きまくった。新しい６・３・３制、男女共学への問題提起なども生徒の立場から論陣を張った。特徴は先生方の授業に対する手厳しい批判で、当時の先生方は新聞部がいちばんけむたかったのではないかと、赤松氏（第２代編集長）は語る。

今も続く、「天声人語」をならった「淀江眺望」はその当時から辛口のコラム欄であった。

又、大手前との交流は最大関心事で、北野大手前学園新聞は共同で発刊、その後も、当時の両校新聞部ＯＢの交流は続いている。

六稜新聞は創刊時より、いわゆる自主独立の立場をとり、生徒会の機関紙的性格はもたなかった。この流れは、現在にも続いている。

しかし、新聞の誌面づくりにたずさわる若者は少くなり、時には部員一人という時期もある。その中で、六稜新聞の燈は燃やしつゝ、新しい連報誌、「The Press RNC」も発刊する今の新聞部に対して昨年の六稜文化振興賞が与えられたことは意義がある。



六稜新聞題字の移り変わり

【グライダー部】
戦争とともに歩んだ歴史
わずか5年のグライダー部

数ある北野の資料の中で、なかなか見つからなかったのがグライダー部の存在だった。
というのは勝利の栄光に輝く長い伝統を持つクラブでなく、むしろ戦争とかかわることで発足し、敗戦とともに消滅したからだ。

部の新設は昭和16年5月。その名も北野中学校報国団、国防部滑空班だった。その年の6月30日、朝日新聞社より光式三型と呼ばれる初級滑空機2機が寄贈され、北中第1号、北中第2号と命名された。秋の運動会には初登場し、5年生(55期)と4年生(56期)の部員が堂々と滑空した。当然の事ながら、3年生を大いに刺激したようだ。一挙に14人が新しく部員となった。

練習は、今の北野高校から約5キロ上流にある淀川北岸の豊里滑空場だった。今でこそ、太子橋が架かり交通も便利になったが、梅田方面からの部員は渡しで通うというのどかなものだった。

校庭で飛行するグライダー部

しかし訓練は厳しかった。紙面で再現するのは困難だが、簡単にいえば、長いゴム索を20人ぐらいが2列に並び、引っ張ってパチンコの要領で飛ばす、というシンドイ作業。しかも2時間かかってやっと1回乗れる、というものだった。

当時の名簿によると、55期18名、56期9名、57期14名、58期9名、59期7名、最後の60期が5名と計62名で、運動部のなかでも最も少ないOB部員だろう。

敗戦によって解散させられた滑空班だが、59期の岡原進氏は『操縦さんを握りしめて大空を飛翔した感動は、素晴らしい思い出として残っている』と感慨深げだ。

北中1、2号機は、豊里滑空場で焼却され、その終えんを60期が見守った、という。

【サッカー部】
やっと“サッカーの時代”が
いまや、部員120人の大世帯

Jリーグの発足で爆発的に沸いているサッカーの人気は、いまや野球を追い越す勢いである。全国大会に出場を果たすなどの誇るべき実績はないが、創部当時にこれ程のブームだったら部史を大きく塗り変えていたかもしれぬ。

▽ サッカーとは、で陳情

昭和22年に創設された頃は、大阪府下でサッカーを始めていたのは明星、堺中(三国丘)などがあったがわずかで、珍しいスポーツだった。それだけに、部の創設に奔走した当時の苦労は大変だったようだ。初代キャップテンの吉田孝司氏(61期)は部創設の陳情のため議員会議に乗り込んだ。わずか一面しかないグラウンドに野球、ラグビー、ハンドボールなどが、いわばひしめきあって練習していたうえ、物資欠乏の時代、校友会の予算も限られており、新たな部の新設などとんでもない、といった雰囲気だった。が、議員会議での陳情はもっぱら“サッカーについてのレクチャー”だった、という。

国際的にも最も普及している球技のサッカーだけに隔世の感がする。

▽ まるで戦車の突っ込み

そんな事情もあって、創部当時の苦労話をもう少し続ける。62期の新原健市氏によると、部の結成そのものが、大阪府の大会に参加の案内が舞い込んだのが切っ掛けだった。

大阪府中学サッカー大会に、天王寺中学などと初参加(出場は16校)した。サッカーボール一つでのスタート。人数だけは何とかそろえたが、サッカーシューズなどという“高級”なものはなかった。軍靴か運動靴のいでたちで試合に臨んだ。

初戦の相手は優勝候補の明星商業とあってパスで翻弄され、キックでど肝をぬかれ惨澹たるもので勝負にならなかった。試合後の部員の感想は『相手の靴が、まるで戦車が突っ込んでくるように見えた』。

▽ いずれJリーグのスターも

絶えず、ぎりぎりの部員という厳しい部活動だったが、29年には新人が10人近くも入部、一挙に活況を呈した。31年の冬季大会では準決勝にまで進出した。3位に終わったものの、期待を膨らませるものだった。国体予選は、優勝した追手門高校と準決勝で対戦、終了間際に追い付かれ延長戦で逆転され、“悲願”を果たせなかった。当時のキャプテン泉裕二郎氏(69期)は『今だに思い出しますよ。あのゲームは…』と、悔いが残っているという。

また、35年には大阪府冬季大会の決勝では2度の延長のすえ敗れたのも苦い思い出だ。33年から45年までコーチを務めた難波寿太郎氏(68期)は『部員集めには泣かされたが、今は120人の部員がいると聞いている。そのうちJリーグで活躍する選手が育ってくれれば…』と、むしろブームのサッカーに期待を寄せている。

【バスケットボール部】
昭和15年に全国ベスト8
戦後も活躍のバスケット部

男子は昭和3年、女子は同23年の創部。大変古い歴史をもっている。『北野110年史』の昭和15年の頃に『籠球部、全国大会で活躍』と記されている。12年に大阪府大会で優勝、14年に国体初出場し、15年には全国大会でベスト8の好成績を収めた。これを第1期の黄金時代とする。第2期は大阪、近畿の大会で14回も優勝した戦後の22年から26年にかけての時代だ。21年の国体出場に続き22年にも連続出場、さらに24年から26年の3年間、西日本大会に進出するなど輝かしい足跡を残した。33年の仙台で開かれたインターハイの出場を最後に全国大会への道が閉ざされているのが残念である。

▽ 府下で敵なし

さて、その第2期黄金時代のキャプテンでOB会長の正岡徹氏(63期)によれば、速攻や逆エイトのスクリーンプレイが得意で、大阪府下では敵なしの勢いだった。しかし、全国の壁は厚く、なかなか上位への進出はならなかった。毎日新聞の大阪版に『北野の正岡の美技は特に目立った』と報じられ1回戦をものにした23年の西日本大会も、優勝した倉敷老松高校に2回戦で当たり49対50で逆転負けした。

この年、女子部が誕生した。昭和32年のインターハイ予選の準決勝で大谷女高と対戦、延長の末破れはしたが、当時の顧問博本正和先生は『感動の試合だった』と、部報に記している。

▽ 部室は掘っ立て小屋

創部当時の苦労話を、その部報『去辺(ゆくえ)』から紹介する。44期の岩木正彦氏の一文……

わたしは、大正15年に北野中学に入学し、昭和6年に卒業した。バスケット部に入ったのは3年生の頃からだったと思う。1、2年先輩が創設されたようだったと思う。名前は忘れたが、確か『地震』という先輩がいて、この人が尽力されたようだ。

なんと言っても、バスケットの草創期で、これという指導者もいなかったので、各自が本を読んだり、工夫してやってきた。屋外のコートとあって、試合の前などはコートの砂を外に掃き出すのが一苦労だった。それから石灰を水で溶かせての線引きである。

当時の校舎は中津だった。阪急電車と接するところにコンクリートの塀があったので、その塀に古材木を集めて2平方位の掘っ立て小屋をつくった。これが部室だった。

【社会科学研究会】
あの熱い社研はない

社会科学研究会というより『社研』の方が知られている部である。その響きが、社会に関する研究というより社会を変革していく行動に結びつくような感じで、好奇心旺盛な少年の胸をときめかして、入部した人も多い。

スタートは昭和24年だ。2年生だった徳永行平氏（63期）ら多感な5人の同級生が、創設した。当時は、戦後の混乱期で、政治状況も混とんとしていた。それだけに活動も唯物論の勉強もさることながら、政治問題に関するビラを配ったり、ポスターを貼ったりするのが主だったようだ。

徳永氏によれば、24年に早くも、1年生部員のひとりが、反戦同盟を結成し、派手に署名運動などを展開したため、放校処分を受けた。社研などが中心となって全校集会を開き、抗議に立ち上がった。結局、自主退学でけりをつけたため、北野を揺るがす運動には、ならなかった、という。

▽ 刺激的な評価が魅力

そんな状況だったせいか、校内での社研に対する評価は『先輩に吹田事件の被告がいるそうや』『去年の運動会のクラブ行進で、社研だけが逆回りした』などと、刺激的だったようだ。

その刺激に誘われて30年に入部したという黒田悠紀子さん(69期)は『部室は2階北側の廊下の突き当たり、身動きするのにやっとの“広さ”で、たえず部屋に人がいた。机の上の灰皿と吸いがらには驚かされた』と当時を振り返える。

部活動の中心は、読書会で『史的唯物論』や『ものの見方、考え方』などが教材だったという。文化祭には機関誌『指針』の発行に全力を挙げた。

他校の社研との交流も活発化、原水禁大会などの集会へも自主的に参加した。

黒田さんは、当時の林武雄校長の『マンネリ化した文化祭をやめてはどうか』の発言に抗議し、校長室へ押しかけた思い出は、何かにつけて燃えた青春の証しだったという。

が、いま、あの熱い『社研』はない。

【囲碁・将棋部】

田村光一先生(昭52—59年)の指導のもとにはじまった囲碁・将棋同好会は、昭和55年・第4回全国高校囲碁選手権大阪府大会に4名が出場、その中で、鳴上佐紀子3段(95期)が府代表として全国大会に出場、第6位となった。又、昭和57年の第6回には清風に1—2で惜敗したものの、松澤邦明4段の強さが光った。この年、泉悌二校長が大阪府高校囲碁連盟の初代会長に選ばれた。

将棋の方でも、昭和59年、大阪府高校将棋大会に準決勝で布施工に敗れたものの3位、翌年は決勝で高津に敗れたが準優勝。

全国選手権では男子ベスト4に入る。

平成3年になると、全国高校囲碁選手権府大会で男子2位、女子優勝など快挙が多い。

昨年、念願の部に昇格したが、近畿高校囲碁選手権3位、全国高校囲碁選手権大会2位だ、着実に力をつけてきた。近い将来、私学の雄、清風を破って全国大会に出場する日も来ると思われる。

【水泳部】
プールは60周年の記念事業
「六稜水泳部」が正式名称

国民皆泳の政策がおし進められていた明治期に、早くも『水泳科創設』の記事が、資料に散見する。北野110年史によると、『明治17年7月、水泳科創設、水泳授業はじまる』と、さらに大正3年には、水泳教師団が発足、堺大浜で生徒の水泳の稽古が始まっている。そして14年には水泳練習場が甲子園浜に移され、昭和13年まで続いた。

大正時代の堺大浜での水練

▽『北野』ではなく『六稜』

自前の六稜羽織で、今も応援席の最前例に立つ岡田喜雄氏(40期)は『北野の水泳は、ゆうに百年を超えている』と解説する。

ＯＢ会の『六稜水友会』会長中井正明氏(64期)によれば、会報の『稜水』６号に昭和11年に卒業した先輩の記述として『競泳部にスカウトされた』とある。したがって昭和６、７年ごろに『競泳部』として発足したのだろう、と。いつの時期に呼称が変わったかも定かではないがこの部は『北野水泳部』と名乗ったことがない、いつも『六稜水泳部(ＲＳＣ)』で対外試合などに出場して活動を続けていたというのも、他の運動部と異なるところだったようだ。

▽ 名目は防火用貯水池兼用

さて、多くの卒業生が親しんだ通用門わきの『50㍍プール』は、昭和18年、生徒保護者会、いまでいうＰＴＡが中心となって『創立60周年の記念事業』として造られたものだ。時局柄、防火用貯水池兼用ということで許可されたものだ。それだけに土掘り作業などは、ほとんどが生徒の勤労奉仕だった。しかも必要な鉄筋も十分揃わず、45年の大修理の際、鉄筋１に対して竹筋２の配合で造られていたことが、判明している。

▽ プール完成で黄金時代

プール完成の年に始った校内水泳大会が恒例になるのだが、このプールから戦後すぐに国体の大阪代表が育ち『六稜水泳部』の黄金時代を築くのだ。そのトップを切ったのが62期の林宏之氏、63期の上山敏生氏で林氏は短距離、上山氏は背泳で、いずれも大阪大会で優勝、国体出場を果たす。続いて中井氏が800㍍、1500㍍の自由形で大阪のナンバーワンとなって国体に出た。また、女子も26年に吉田淑子さん(66期、現八代)が平泳ぎの100㍍、200㍍で活躍し、国体にこまを進めた。

【書道部】
阿部教室を継承

阿部後一(醒石)先生の書道の授業を受けていた渋谷雄一郎(62期)、山口義明(63期)、巽敦子(旧・星野)、徳岡幹子(旧・木村)氏らが書道の向上をはかろうと、昭和23年、創設した。書道教室を部室にして、先生のお手本を稽古し、文化祭・高校書道展へ出品することが主な活動であった。山口義明氏の部長時代、大阪府高校書道連盟が結成され、活動も活撰になる。知事賞を西田説二氏(66期)が受賞したり、毎年上位に入賞する時代が続く。山口義明氏は卒業後も後輩の指導に来校したり、ＯＢ・現役合同合宿の世話をするなど、阿部サークルの面倒をみている。阿部先生とのつながりは書道部ではことの外強いようで、高端正直氏(68期)は、『卒業後は一時中断したこともあったが、再び阿部先生の御指導をＯＢ・ＯＧで受けている。書道が生涯の友となるでしょう』と語る。

昭和55年、先生退職後も、教え子である高岡靖弘先生(78期)が顧問を引き継ぎ、現在の書道部も阿部書道を受け継ぎ、文化祭出展に、校外発表にとめざましい活動を続け、平成３年、第７回六稜文化振興賞を受賞している。

【バドミントン部】
早朝練習で
インターハイ優勝をねらう

同好会として発足したのが昭和48年、バドミントンがスポーツとして注目を集めはじめた頃であった。練習場がなく、体育館を早朝に使って練習するという苦労が続いたが、昭和58年大阪高校地区予選の団体優勝を機に、次第に力をつけはじめ、平成２年には、インターハイ予選で、男子団体ベスト４、そして、昨年は、吉野健太郎氏(105期)が近畿大会、春のインターハイでベスト８、冬の大阪高校選手権で優勝という快挙をなしとげた。又、女子団体も夏の大阪総体でベスト８入りし、今年の大会はシード校として出場する。

本年４月からは、長年の宿願であった部への昇格が認められた。相かわらず体育館が放課後使用できず、７時からの早朝練習を伝統にして、今、部員40名ががっちりまとまっている。ＯＢ会も安井譲氏(91期)を中心に後輩達の面倒をみようという動きがようやく芽ばえてきた。今後の活躍が期待される部である。

【文芸部】

校友誌「六稜」から
「北野文学」を発表の場に

明治25年に発足した校友会に武術、運動に加えて文芸部の名が見える。この文芸部は、戦後の生徒中心のクラブ活動とはいえず、いわば学校教育に組み込まれたものだった。しかし、校友会によって発刊された『六稜』（第1号・明治29年2月）には厨川白村(明治26入学)が訳詩と短歌を寄せている。

この校友会誌・『六稜』には、梶井基次郎（32期）、森本薫(42期)、野間宏(45期)氏等も寄稿して、青春のみずみずしい彼らの文学のはしりをみせている。

戦後、この校友会誌は廃せられ、新たに生徒による文芸部がつくられたが、新文学運動ともいうべき活動がおこった。木口健治氏(63期)の部長時代、部員勧誘キャンペーンに応じて入部した部員は70名を超え、ロマン、エッセイ、詩、和歌、俳句、戯曲の各部にわかれての活動がはじまる。その中でも戯曲部内では『実験劇場』と称して、月1回階段教室でオリジナルの発表を行った。

又、文化祭では、前部長・西田晃氏(62期)演出のオリジナル『何もない道』と木口氏の脚色演出による樋口一葉の『十三夜』の二本立て上演、これは演劇部の2本と同じであった。『十三夜』では大阪駅の人力車夫のおじさんから人力車を一日借り切るというエピソードもあった。

このいわば、文芸復興期を経て、再び静かな文芸部の時代が続き、部員は北野文学を拠りどころに、それぞれの作品を発表していく。

昨年、『北野文学』は52号を迎えている。部員は女子のみだが、部内雑誌『幻』も別に発行し、地道な創作活動を続けている。

【写真部】

卒業アルバムは北野の思い出のよすがである。

アルバム委員には写真の得意な人達が選ばれた。

まだ、カメラが高価で貴重な時代であった。写真マニアたちの個人の活動から部への脱皮がはかられたのが、昭和33年から34年にかけての大橋公平、池永博省(72期)氏らの時代で、物理教室の隣の暗室を使って現像がひっきりなしとなった。文化祭での発表も活発になったし、池永氏などは後輩の指導に卒業後も来校する。久保田光氏(76期)も後輩の面倒をみるため『かかしくらぶ』をつくったほど。しかし、カメラマニアにはあまりタテのつながりはない。六稜写真展などの話も持ち上るが実現していない。

その後も、写真部は文化祭を足場に地道に発表を続けているが、対外的にも昭和55年、佐野剛氏(93期)が第1回オリンパスフォトコンテスト学生部門に入賞するなどの実績もある。

編　集　後　記

母校創立120周年にあたって、『六稜クラブ活動』の歴史を編め、会報臨時号を特集しようとの話が決まった。120周年記念事業委員会の中の広報委員会は、スタッフ20名で各クラブの歴史をたどった。しかし、時間の制約もあり充分な調査ができず、また、会報誌面の制約もあって、写真も含めてすべてを掲載できなかったことは心残りである。

限られた調査ではあったが、六稜120年の重みはひしひしと感じられた。開学期の先輩の活動は、明治・大正の近代国家勃興期の意気込みが伝わって来るし、大戦中の重苦しい時代にも、自由を求めたクラブ活動の息吹きがある。また、大戦後、運動部がいちはやく北野の名を上げるのと同じく自治会、新聞、文芸、社研、演劇などが解放を謳歌するさまも感動的であった。

百花撩乱のクラブ時代の後、今の北野はどうだろう。120周年にあたり、北野のクラブ活動を卒業生として考えてみるのも無意味ではない。

北野の図書館には開学以来の貴重な資料文献、寄贈図書など8万冊があるという。

120周年を機に、これらの資料を整理・保存管理する六稜史料館の構想がある。今回の六稜クラブ活動史を編集するにあたって、各クラブの貴重な資料も是非この構想の中に組み込めればと考えている。

今回とり上げた40団体の他にも、潜艇部、射撃部などの歴史的なもの、文化関係では図書部、地歴班など、最近では鉄道研究、料理研究、フォーク音楽などの同好会もあったが、割愛せざるを得なかった。お許しを乞う。また、記録には思い違い、伝聞の不充分も多いと思われる。これを機に歴史の誤りが正されて行くことを期待したい。120周年記念事業の成功を祈りつゝ。　(M.K)

事務局から ☆ 名簿委員会より ― 新名簿予約受付継続中　予約特価5,000円!!
☆ 行事委員会より

★フェスティバルホール記念行事は4月30日の消印をもって締め切らせていただきました。
今回の120周年記念行事は、同窓会・学校・ＰＴＡとの共催行事という趣旨にそうて、音楽会には1・2年生、式典(講演を含む)には3年生の参加を予定しております。ご理解いただきますようお願いする次第です。なお、ご出席いただける方には整理券を発送してご連絡に代えさせていただきますので、併せてご了解くださいますようお願い申し上げます。

★10月30日のロイヤルホテルの祝賀会は、まだ若干の余裕がございますので、お早めにお申し込みください。(会費10,000円) 後日会費の振り込み用紙を送付させていただきます。